

陸羯南と新聞『日本』の人々

——陸羯南研究会の歩み 中間報告——

高木宏治

1. 陸羯南研究会の発足

明治中期に政論を中心とする新聞『日本』を創刊し、主筆兼社長として国民主義の言論活動を展開した弘前出身のジャーナリスト、陸羯南（一八五七～一九〇七）。

日本の近代ジャーナリズムの先駆者として知られる彼の功績や、彼のもとに集まった人々の実像を研究する社会人グループが「陸羯南研究会」である。

筑波大学時代の私の恩師であり、元産経新聞編集局長の故・青木彰筑波大学名誉教授の遺志を継ごうというのが結成の趣旨で、主要会員は、ほぼ青木教授が筑波大学在任中に開いていた私塾「青木塾」の門

下生と有志である。

青木教授は新聞社時代の同僚だった作家司馬遼太郎氏と親交が深かった。

司馬氏は、その著書の中で、青木教授のことを紹介している。

互いに若いころ、同じ新聞社にいた。（中略）

大学は東大だが、その前は海軍兵学校にいた。

事件報道のデスクとしての仕事ぶりも、艦橋から艦隊決戦を指揮しているようなりりしさがあつた。

編集局長になってから社をやめ、筑波大学で新聞学を教えた。

定年後は、東京情報大学に転じ、いまなお情報についてのことを教えている。

この青木彰氏の父君は、ミッドウエー海戦で沈んだ航空母艦「赤城」の艦長の青木泰二郎大佐だった。

日本側が大敗した。敗因の一つは、情報だった。日本側の暗号の八〇パーセントがアメリカ側に解読されていて、いわばボーカールの手の内がぜんぶアメリカ側に読みとられていた。

「赤城」の艦長の子息が、半生、実務と学問の主題を情報に置きつづけてきたのも、ミッドウエーの悔恨と無縁でなかったかもしれない

(司馬遼太郎「街道をゆく、三浦半島記」朝日新聞社)

二人は、同じ産経新聞に勤務していた、という縁もあり、新聞で『竜馬がゆく』の連載の際に、青木教授が文化部長として担当したことから親交が深まった。幕末ものを書く入口として、当時『新撰組始末記』、『勝海舟』等の一連の作品でこの時代の作品の権威であった子母澤寛氏の自宅に、二人で訪ね、教えを乞うた、というエピソードを語る青木教授のインタビュー映像が残されている。

青木教授は、新聞社から筑波大学教授に転じた。その青木教授に対し、司馬氏は手紙を送っている。

たれか、講師をよんできて、

「陸羯南と新聞日本の研究」というのをやりませんか。

数人が、講師（臨時の）をやって、共同研究式にやって（多分に啓蒙的でも可）、大学の出版局から、軽装の本を出したらどうでしょう。

「陸羯南と新聞日本の人々」

でもいいです。もしおやりになるなら、小生、学問的なことは申せませんが、子規を中心とした「日本」の人格群について、大風に灰をまいたような話をしてもいいです。露はらいの役です。

羯南には、幸い全集があります。

三宅雪嶺、鳥居素川、丸山侃堂、古島一雄、正岡子規、長谷川如是閑、福本日南、国分青崖、中村不折、五百木飄亭……

まことに多士濟々です。羯南の死とともに傾き、同人たちはやむなく朝日へゆきました。朝日の興隆は、「日本」の人材と精神が入ったからです。新聞はイワシのアタマでもいいから、哲学をもつべきなのです。

子規が病床にあるとき、同郷の寒川鼠骨が三高を中退して、升さん（子規）のところに、身のふり方の相談にきました。

鼠骨は、朝日の校閲にすでにハナシがあつて、その上で相談したので。子規は、鼠骨が朝日に入ることに反対しました。

理由は、鼠骨自身が書いています。（講談社。子規全集別巻三「回想の子規」の中の三六九頁）

子規、曰つ。

人間は最も少ない報酬で最も多く働くほどエライ人ぞな。一の報酬で十の働きをする人は百の報酬で百の働きをする人よりエライのぞな。収入の多寡は人の尊卑でないことくらゐ分つとろがな。

人は友を扱はんといかん。「日本」には正しくて学問の出来た人が多い、他の新聞社には碌な人間は居ないぞな。アシでも他へ行けば七十や八十円は呉れるのだが、三十円で「日本」に居る方がいいと思つてな。

「マア辛抱おしや。今の内に本をお読みや。繁華畢竟、読書難といふじゃないか。本を読むのに左程金はいらんものぞな。」

付記、鼠骨の文章の中に、当時の自分の事情が書かれている。日本は校正係で月俸十二円、それも優遇とのこと。朝日新聞は議会係で二十五円。

私は、前期『子規全集』を監修しました。そのとき講談社の編集長として命じられたのが、私と同年の松井勲でした（故人）。松井は、憑かれたようにこのしごとをやり、半ば肝臓をやられ、死にました。

かれに私家版の遺稿集があります。小冊子で、その中に〈日本〉を少し調べたみじかい文章があります。その文章のタイトルをとつて、遺稿集は「新聞『日本』の人々」ということになって

います。非売品で五百部上梓。発行者は松井勲遺稿集刊行会です。大兄においてもし必要になったとき、小生のを貸して上げます。

右、如何。
御笑考を。——こんなことはありませんが。

1986年12月28日

（「司馬遼太郎からの手紙」朝日新聞出版社）

数か月後、更に丁寧に資料の紹介もしている。

羯南については、羯南全集のほか、子規全集（講談社）も、研究室に必要です。

当時、子規全集の編集長をやった松井勲の急逝後、駒井皓二（東京教育大國文科卒）があとをつぎ、駒井は目下蕪村全集を準備中ですが、松井・駒井編集室にあつめられた資料のうち羯南のを貸せ、とおっしゃれば（もしそんなものがあるなら）駒井君は尽力してくれるはずです。駒井は底抜けにいい男です。学者でもあります。母校（になるのかな）のためでもありますから、力を貸してくれると思います。

ついでながら、子規全集当時、小生は監修委員でした。右、羯南を大学の研究室に入れたくもあって、懸命の文章であります。（ジャーナリストは国文学にも政治学にも所属しません。青木研

研究室にしか安住の場所なし)

1987年2月4日

(「司馬遼太郎からの手紙」朝日新聞出版社)

司馬氏は、その著、『坂の上の雲』を書いた際に、主人公の一人である正岡子規を育てた人物として、陸羯南を高く評価していた。

子規が東京でひとりうごきできるようになったのは、叔父の加藤恒忠の尽力によるが、加藤よりもさらにかれの力になったのは加藤の友人の陸羯南である。羯南は子規にとって生涯の恩人だった。

羯南

本名は、実。

旧津軽藩士の次男である。

明治九年に上京して、当時司法省が秀才養成のためにつくっていた司法省法学校(東京大学法学部の前身)に入った。そのとき加藤恒忠もこの学校に入った。

ほかに、原敬がいる。

国分青厓、福本日南もいる。

この当時、この学校は校長以下薩摩閥で運営されており、その運営態度が羯南にとって気に入らず、ついに校長と衝突して放校になってしまった。

其の後北海道にわたったが、ほどなく東京に帰り、太政官(政府)文書局の翻訳官になり、フランスの法律関係のものなどを訳していた。ほどなくやめ、新聞「東京電報」の社長になり、やがて新聞「日本」をおこし、明治四十年病没するまで明治の言論界の巨峰をなした。

(「司馬遼太郎」『坂の上の雲』)

正岡子規の一族について書いた作品『ひとびとの聲おと』の中でも、羯南の娘たちを訪ねたエピソードを書いている。

i 子規旧居

(前略)子規の病室については、

「六畳の病室の天井からひもがぶらさがっておりまして、そのさきに大きな駝鳥の卵がついていたのをおぼえています」

と、私に教えてくださったのは、葉山に住む最上巴さんであった。

子規の『仰臥漫録』の明治三十四年九月五日のくだりに、陸羯南の夫人が、その四女と五女のふたりをつれて病室にやってくるところが出ている。「巴サントオシマサン」と子規が書いている前者のほつが右の最上巴さんである。オシマサンと書かれている妹君と、当時まだ幼すぎてあるいはひとり歩きができなかったかと思われる一番下の五十子さんの三人が、いまは葉山の一色の丘の家に住んでおられる。去年(一九七九年)、末の五十子さんが

八十を越されたときから、三人とも賀すべきおとしである。

『子規全集』（講談社版）の月報に、巴さんが、談話速記をかか
けておられる。あるいは、巴さんが、生前の子規を知る唯一の人
かもしれないが、ともかくもその談話速記を読むと、羯南と子規
宅の関係位置がよくわかる。

私どもが子どもの時分には、子規庵と陸の家とは狭い空地を隔
てて隣同士でした。子規さんが亡くなられてから空地に一軒建ち
まして、それからは一軒おいた隣同士となったのです。当時の子
規庵は今よりもずっと庭が広くて、庭に面して縁のついた八畳
と、縁のない六畳の（中略）間が続いてあり、子規さんは六畳の
間に寝ていました。その六畳の障子は、寝たままでも庭の鶏頭や
鳥籠が眺められるように、亡くなられる二、三年前からガラス戸
に変えられていました。

当時は、庭の裏側の四畳半と台所の間に玄関があり、門もそこ
についていました。その門から入って、家と塀の間にある人一人
ようやく通れるくらいの隙間を歩いていけば、下駄をぬいで家に
上らなくとも庭へまわることが出来たので、私も鳥籠へエサを運
ぶ時なんぞは、その門から入って細い隙間を通り、台所口でお律
さんやお母さんに声をかけてから庭へまわりました。

羯南は、病中の子規にこまかく気をくばっていた。たとえば朝

鮮から帰ったときも、むこうでみやげにもらった少女用の晴れ着
を巴さんに着せ、正岡さんが退屈しているだろうから行って見
せておあげ、と隣家へゆかせた。子規はよろこび、巴さんをしき
いむこうの八畳の間に立たせ、自分はずらしくふとんの上にし
きあがって写生をした。墨で描いたためにそれぞれの部分に白、
紫、黄といったように書き入れ、絵の余白に「芙蓉ヨリモ朝顔ヨ
リモウツクシク」と書き添えた。素朴な写真主義の行者のよう
であつた子規は、この服の感触を何にたとえるべきかを考えた。ま
ず花を連想した。花のように美しいとおもつたが、しかしおなじ
花でも芙蓉や朝顔といった薄手の花が似つかわしいと思い、最後
に思い直してそれらよりも美しい、と書き添えた。また和服とも
比較した。和服ならその軽快さにおいて友禪に似ているが、友禪
のほうが劣るとおもつた。余白の感想のなかに、「服八立派ナリ
日本モ友禪ナドヤメテ此ヤウナモノニシタシ」と書いたが、こ
ういふささいな感想のなかにも明治の改革者らしく改革論としての
文脈になってしまっているのは、子規の人柄の自然なおかしみの
一つといつていい。

さて、

「駝鳥の卵」

の一件である。

病床の子規が、天井からひもをぶらさげているのは、繻帯替え
のときなどにそれをつかんで上体を浮かせるための力綱であつ

た。子規の病室に侍することが多かった伊藤左千夫によると、「東の鴨居へ麻縄を張り、其より白木綿の紐を釣り、それにつかまつて幾分にも体を浮かして病み所をゆるめるために候」とある。繃帯替えのたびに子規が泣きさげぶことのはげしさは子規自身も書いているし、巴さんなどもなまでそれを聞いた。叫喚がはじまると、巴さんは怖れて飛んで逃げた。「子規庵の前の鶯横丁と呼ばれていた露地のあたりまで聞こえてきたものです」（前記・月報）という。

そのひもの末端に駝鳥の卵がむすびつけられていたということ、は、どの文献にも出ておらず、私なども巴さんからじかに話をきくまで知らなかった。

(中略)

子規が、
「羯南翁」

というとき、涙のにじむような感情がつねに湧いたという。漱石への手紙にもそのことを書いたくだりがある。病中、痛みのために号泣するとき、竹藪のむこうからやってくる翁(といつても当時、四十代であった)が枕頭で「よしよし」とつぶやきつつ子規の手を握ってくれていると、ふしぎに痛みがやわらいだ。

このことについては、当時、虚子、左千夫、および碧梧桐の三人が看護番として共同で執筆した「病牀日誌」(看病日誌といふべきもの)にも触れられている。この日も、羯南が隣から様子を

見にきたのであろう。

羯南翁八婦ラレタ 飄亭ガ来タ アトデ子規君ノ話ニコノ間
某新聞ニメスメリズム(註・動物磁気説 患者との接触により患者の体内へ一種の磁気を注入するというやや神秘的な学説・治療法) ノ話ガアツタガアレト同ジ事デ羯南翁ノヤウ
ナ感情的ナ人ニ手ヲ握ツタリ額ヲ撫デタリシテ貫フト神經的
ニ苦痛ヲ忘レル……

とある。子規のいう感情家とは、感情が固有に多量な人をさすかとおもわれる。羯南が属した時代の前後でいえば、西郷隆盛、宮崎滔天といったひとたちが感情家といえるであろうか。

写真でみる羯南の風貌は北辺のうまれらしく白皙秀麗で、両眼がきわだって大きい。拳措に古武士の風があり、みずから「文章は是れ精神の顕表なり」(『近時憲法考』)といっているように、文体からその風骨を十分察することができる。その文章については『陸羯南全集』(みすず書房刊)があるが、その人の日常のふんいきについては子規の文章で想像するよりほかない。

羯南もまた、長命ではなかった。子規のあと五年、五十歳で急逝した。

(中略)

子規が松山を出てゆくについては、在京中の叔父加藤恒忠(拓川)をたよった。というまでもなく拓川は忠三郎さんの実父である。

あいにく、拓川に、旧藩主の若様に随行してフランスへ留学するという件がふつてわき、渡仏の準備に忙殺されていた。やむなく拓川はこの甥の世話を友人の陸羯南にたのみ、やがて叔父は横浜から出帆した。

羯南は津軽藩の旧藩人である。

明治九年上京し、設立されてはともない司法省法学校に入った。この学校はその前々年に佐賀ノ乱で刑死した司法卿江藤新平が設けたもので、フランス語とフランス法を教える官僚養成所というべきものであった。このとき旧南部藩からは原敬が入校し、旧松山藩から加藤拓川が入校している。

が、生徒のなかに不羈の者が多く、とくに数人が仲間を組み、薩摩閥の威を藉りる校長にはげしく反撥した。このため在校三年で連袂退学したが、この退学組に拓川、羯南があり、他に原敬、国分青厓、福本日南がいた。退学したことによつていつそうかれらの仲間の友情のむすびつきがよくなつたらしい。

子規との初対面について書いた羯南自身の文章では、「明治十六年の夏のころと記憶してゐる」

とある。羯南宅に十五、六歳の少年がやってきたので玄関に出てみると、浴衣一枚に木綿の兵児帯という姿で、いかにも田舎から出たての少年書生のように見受けられた。

加藤の叔父が往けと云ひますから来ましたと云つて外に何も言

はぬ

と、ある。羯南の文章はさらにつづく。この少年に対する印象は「何処か無頓着な様子があつて」ということであり、さらには「ことばのはしはしに余程大人じみた所がある」ということでもあつた。細節にこだわらざるべきでないというのは江戸期の士人に要求された徳目であつたが、羯南がいう無頓着とこの場合通じあつている。また元服後は童臭を去らしむべしといわれた。「大人じみている」というのは、羯南にすれば十分に褒辞であつた。

「ひとびとの聲音」子規旧居

拓川居士

(前略) 拓川にとつて法学校時代以来の友人である陸羯南は、明治二十四年、一種の同時代史として『近時政論考』(日本新聞社刊) 一巻をあらわし、維新以来の政論の変遷を分類している。

そのなかで兆民らの思想と運動を第三期に位置づけ、それ以前の悒鬱民権や翻訳民権よりも「一層深遠なりき」とし、その理由として「西洋十八世紀末の法理論を祖述し多く哲学理想を含蓄すればなり」とする。

以下、兆民についての羯南の理解を知るために、右の文章のそのくだりを抜き書きしたい。

……中江氏等の重に崇奉せしはルーソーの民約論なるが如く、政理叢談（明治十五年、仏学塾から半月刊で出ていた雑誌。前記の漢訳『民約訳解』もこの雑誌に連載された。同時代の在野政論にもっともつよい影響をあたえた雑誌といつていい）は殆んどルーソー主義と革命主義とを以て其の骨髓と為したるが如し。其の説の大意に以為らく。自由平等は人間社会の大原則なり。世に階級あるの理なく、人爵あるの理なく、礼法慣習を守るべきの理なく、世襲権利あるの理なく、従て世襲君主あるの理なし。俗は質樸簡易を貴ぶ、……

兆民の思想について簡述した羯南の右の文章は、拓川の生涯における思想——というよりも思想的な気質——を要約しているかのようにもある。ただし拓川の場合は、兆民のように著述家になることなく、運動家にもならず、生活のために——という傍証がいくつがある——外務省の在外公館につとめ、以後ながく官にあった。しかし官にありつつも官の思想はかれにとって薄い衣をなしていた程度で、本質は——すくなくとも風骨の上で——兆民と同類にちかかったようにおもえる。

（中略）

この六月十五日は、暑い日だったらしい。三並良は子規を案内して向島へつれて行った。

拓川は、この前の月から、向島の木母寺のほとりにある料亭

「東屋」の一室を借りて住んでいた。おそらく久松家からの支度金によるものであろう。

ふたりが訪ねてくると、拓川はすぐ兩人をつれて「東屋」から一町ばかり離れた百姓家へつれてゆき、その一室でさまざまの話をした。このときの子規についての印象を拓川は友人の羯南に、「まだホンの小僧で何の目当も無く」といつている。

「おまえ、東京に出てきて、将来何になりたいのぞな」と、拓川はなかなばからかうように、きいた。

拓川が見ぬいたとおり、子規にめあてというものがなかった。

（「ひとびとの聲音」中央公論社 一九八一年）

また、羯南という人物のもっていた特性についても書いている。

徳

『坂の上の雲』という作品を書いていたころ、明治人の心を知りたくて、庶民の日記、手紙のたぐいまで物読みした。

得た感想は、どうも明治人は、私どもがうしなつた徳をもつていたのではないか、ということだった。むろんすべてがそうだったわけではないが。

（中略）

ついで、同時代の人である陸羯南（一八五七～一九〇七）の風についてふれたい。雅号の意味は、鞅鞅（ツングース系諸族の住む沿海州）の南であるということを示すように津軽（青森県）の出身である。野蛮なシベリアの南なりだという雅号は、東北人の裏返しの自負といい。

明治九年、司法省法学校（東大法学部の前身）に入学し、講義のいつさいがフランス語という三年間をすごした。ただし卒業前に薩摩出身の校長の暴慢に対する排斥運動をおこし、原敬らとともに退校した。

後年、神田雄子町三番地の小さな社屋で、新聞「日本」を興した。

羯南は明治後期の代表的な知識人として、もっと研究されている人物である。西洋化万能の世に対し、日本的伝統の擁護を訴え、政治的には国民統合的な立場をとりつづけた。

秀麗な容貌をもち、情誼に厚く、さらには身辺の清らかさでもって、同人たちの敬愛を得ていた。幕末の安政四年にうまれた羯南は、その初等学問は漢学だった。『論語』のなかでも朗々誦すべき名文とされる「以ッテ六尺ノ孤ヲ託スベク、以ッテ百里ノ命ニ寄スベク、大節ニ臨ンデ奪ウベカラズ。君子人カ、君子人ナリ」（泰伯篇）のくだりは、あたかも羯南のために書かれたようである。

かれの司法省法学校の同窓の一人に、伊予松山出身の加藤拓川がいて、ともに退学した。拓川は、思想的には羯南よりはるかに左で、フランス的民権思想で、生涯をつらぬいた。かれは、外務省の役人になる。

明治十六年のある日、拓川は降ってわいた渡仏の話のために（旧藩主家のたのみで）、準備にいそがしかった。羯南に会い、「我（あし）の甥が、あしをたよって上京してくる。あしはフランスへゆくから、いつさいたのむ」

甥とは、のちの正岡子規である。

山だしの少年だった。松山中学を四年で修了し、拓川をたよって上京してきたのである。羯南にとつて、子規は「六尺の孤」になった。六尺の孤とはべつの意味があるが、ここでは単に年少の身で父を失った者と解しておく。

羯南は、その後、短かった子規の後半生の面倒を見、住まいも、自分の近所に住ませた。

子規は三十五年しか生きなかつた。大学を中退したあと、羯南の「日本」に入った。

月給は入社するとき十五円で、翌年二十円になり、最晩年、やつと四十円になった。「日本」の経営はくるしかったのである（当

時、帝大卒業生の初任給は、官界などでは四、五十円ときまっていた。)

子規は死の前の数年はほとんど出社せず、自宅で臥たきり、「日本」の俳句欄などの選をしたり、「墨汁一滴」などを連載したりした。

病い（脊椎カリエス）の末期は凄惨なほどに激痛をともった。ところが、羯南がやってきて手をにぎっていてくれると、ふしぎに痛みがやわらいだ。

——徳のある人というのはそういうものらしい。

という意味のことを、子規がたれかへの手紙に書いていたような記憶がある。『羯南という人からつけた恩をおもつと涙が出る、これは涙也』と、にじんだ箇所をまるく墨でかこんだ手紙もあつたような気がするが、いまは資料を確かめるのを怠っておく。死の前々年の明治三十三年、熊本の夏目漱石へのながい手紙のなかで、「……ソレテ陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙が出ルノダ、徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」というあたり、いつ読んでも胸がせまる。

寒川鼠骨という人がいた。子規より七つ歳下の松山中学の後輩であった。京都の三高に在学中、すでに俳句人として知られ、「日本」に投稿して掲載されたりした。

その後、学校を中退して、京都や大阪の新聞社につとめたが、

なにかで居づらくなった。

たまたま陸羯南が京都にきていることを知って、面会し、「日本」に入社方をたのんだ。

でありつつ上京し、旧知の東京朝日の主筆の池辺三山を訪ねて、朝日にも入社方をたのんだ。三山はいい返事をした。ところが、東京へ帰った羯南が、鼠骨の入社について決めていた。

鼠骨に『随攷（ずいこう）子規居士』（昭和二十七年、一橋書房刊）という著作がある。それによると、そのころ「日本」は「校正係で月俸十二円、それも優遇だとの事だった。京華日報は社会部記者で十八円、朝日新聞は議会議係で二十五円」とある。鼠骨は、明治人といっても若いほうだから、今風である。鼠骨は値ぶみしてきめようとした。

その時期、鼠骨は、病床の子規をたずねた。子規は当然ながら「日本」をすすめた。

そのときの子規の談話は、鼠骨の遺稿のなかでももっともすぐれたものである。

子規は、松山方言で、リスミカルに説諭した。

人間は最も少ない報酬で最も多く働くほどエライ人ぞな。一の報酬で十の働きをする人は百の報酬で百の働きをする人よりエラ

イのぞな。人の多寡は人の尊卑でない事くらあ分つとるがな。人は友を憚ばんといかん。「日本」には正しくて学問の出来た人が多い。（『随攷子規居士』）

子規がいうように、たしかに、「日本」は人材の巢窟だった。三宅雪嶺、長谷川如是閑、杉浦重剛、福本日南、内藤湖南などがいた。すべて羯南の吸引力によるものだった。

鼠骨は子規にいわれるままに「日本」に入ったが、しかし経営不振は回復せず、さらには羯南その人が結核におかされ、明治四十年、五十歳で死ぬと、社はやがて消えるようになってしまった。なにやら明治の新聞についての雑話のようになった。要するに、佐藤北江と陸羯南において明治人の徳をつたえたかったのである。

（『この国のかたち』4 文芸春秋社 一九九四年）

ほぼ同時期には、『街道をゆく』の旅の中で、羯南の故郷、弘前も訪れて紀行文を書いている。

人としての名山

私の需もとに応じて、養生幼稚園の陸羯南（一八五七—一九〇

七）の書を桐の箱からとり出してくださった。

名山 名士ヲ出ダス

此語 久シク相伝フ

試ミ二問フ巖城ノ下

誰人カ天下ノ賢ナルゾ

（名山出名士 此語久相伝 試問巖城下 誰人天下賢）意味は、名山の見える土地はすばらしい士を出すという。このことばが世におこなわれて久しいが、しかし試みに問うに岩木山の秀峰を見るこの弘前城下から一体どんな天下の賢が出たろうと嘆いている。

（中略）

陸羯南についてのべたい。

私は羯南が明治きつての偉材の一人だと思っている。しかし故郷の弘前では、右の詩を刻んだ碑が一つあるきりである。

この部屋にも、羯南がきた。しかもあるじに乞われ、右の即興の詩を揮毫した。しかしこの室が〈松陰室〉であって〈羯南室〉ではない。

ひとつには、津軽人の過度の含羞がそうさせるのかとも思える。

1960年代から十数年かけて、みずす書房から陸羯南全集

(全十巻)が出た。明治時代の硬派文人を研究する上で、欠かせない全集である。ただこの全集には、羯南の伝記の要素が少ない。

私は、わずかながら津軽人の責任もおもっている。羯南の場合、多いというほどの研究者をその故郷に持っていないのである。

(中略)

津軽で、陸羯南の研究をするより、他国出身者にして死後声価のさだまった松陰をたたえておくほうが、無難なのかもしれない。どうも屈折の多すぎる土地なのである。

鞆羯(沿海州など)は鞆羯と書くのが正しい。が、羯南は「鞆羯」という表記を好んだ。その南に位置するといつかれの雅号は、津軽という地理的位置を雄大に、内籠りに語っている。「私は鞆羯の南の人間です」という雅号なのである。自虐もまじっている。

かれは、安政四年(一八五七)のうまれで、右の一戸兵衛の二つ下である。

明治維新を生年十一でむかえた。少年時代、古川(工藤)他山という学者の塾に学び、塾での授業で詩をつくらされた。その詩に

「風涛、鞆羯の南ヨリ来ル」

という一句があり、津軽の地理と気象学的環境をみじかくきこと

に言いあらわしている。羯南はこの詩句が自分でも気に入って、生涯の号とした。

明治六年(一八七三)、羯南十六、東奥義塾に入学した。一戸兵衛も同窓だった。またこの旧伊東梅軒宅を買い取って幼稚園をおこした伊東重も同窓にまなんだ。

(中略)

羯南のことである。

明治の没落士族の子弟らしく、授業料の要らない学校をと思い、宮城師範学校に入ったが、薩摩出身の校長の横暴をきらって退校した。明治初年の薩摩人には、藩閥風を吹かして東北人を軽んずるような人物が多かったらしい。

そのころ江藤新平が、官吏養成機関として司法省法学校(東大法学部の前身)をつくった。羯南はそこに入り、生涯の友を得た。南部藩から来た原敬、筑前福岡藩からきた福本日南、伊予松山藩出身の加藤拓川(正岡子規の叔父)、仙台藩出身の国分青崖らで、たまたま津軽藩をのぞき、いずれも維新のときに反薩長の態度をとってわりをくった藩の出身者ばかりだった。

ここでも薩摩出身の校長の態度に腹をたて、右に触れた全員とともに羯南は退学してしまった。その後、漂泊のような暮らしを送った。

やがてフランス語の語学力を買われて政府につとめた。のち自ら新聞「日本」を興した。羯南の思想が顕れるのは、「日本」以

後である。講談社『日本近代文学大事典』の羯南の項を借りると、羯南は、政府の西欧列強へのやみくもな仲間入り政策に対し、伝統にもとづいてのおだやかな近代化を提唱しつづけた、という。

かれは、みずからの政治的立場を「国民論派」とよび、「外に對して国民的特立（註・独立）、及び内に向て国民的統一」を求めるとした。政治の腐敗を糾弾し、一貫して徳義を強調するその姿勢は、操守堅固な思想家としての尊敬をかちえた。

（『日本近代文学大事典』）

要するに羯南は当時の用語でいう民権でもなく、また国権派でもなかった。やや国権派寄りの国民派というあたらしい中道主義をとなえ、日本文化や伝統の保存を高くとなえた。

ただしその文章は多くは時務を論じたものだけに、いまは読まれることがすくない。

社業はふるわなかった。

ただ羯南のもとに多くの明治後期の文章家、思想家、言論人があつまった。壯観といつべきだった。

おもいつくままにならべても、『同時代史』の三宅雪嶺、在野の地理学者で『日本風景論』の志賀重昂、終生新聞人の良心といわれた長谷川如是閑などがいた。

正岡子規もいた。かれは「日本」を抛りどころとして俳句・短歌の革命をなした。げた。

子規については、羯南は子規の叔父―羯南にとって司法省法学校の同窓―の加藤拓川からのまれて、子規の学生時代から死にいたるまでの保護者でありつづけた。「以テ六尺ノ孤ヲ託スベシ」（『論語』）とは、羯南のような人をいうのかもしれない。

子規も羯南を慕い、住まいまでその近所にもとめて病軀を養い、その若い晩年には、羯南ことを思うだけで落涙した。

子規は背中に膿の穴がいくつもできるといふ結核性のカリエスで、ときに激痛が襲った。

ところが羯南がきて病室にすわると、痛みまで薄らいだ。羯南は、痛みに哭く子規の手をとり、「ああよしよし、僕がいる僕がいる」といった、という。

「徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」

と、子規が夏目漱石への手紙のなかで書いているのは、最高の羯南評であつたらう。子規は明治三十五年、三十五で死に、その五年後、羯南その人も五十で死んだ。新聞「日本」も、ほどなく消滅した。

この梅軒伊東広之進旧居の「松陰室」には、羯南だけでなく、一戸兵衛も珍田捨己ここにきて、庭をながめたことがあるらしい。

羯南の詩句を借りれば、三人ともども、人として『名山』だったのではないか。

（『街道をゆく41 北のまほろば』 朝日新聞社 一九九五年）

二人の羯南研究に対する気持ちは強かったが、スケジュールがあわず、途中で青木教授が病気になるってしまったこともあり、司馬氏が企画していた研究会を発足することが出来ないままに、司馬氏は一九九六年二月十二日に亡くなってしまった。

青木教授は、追悼寄稿として産経新聞に、「司馬遼太郎と新聞」と題する文章を書いた。

司馬遼太郎さんと新聞

～陸羯南にみていた新聞人の原点～

ジャーナリストを育成するために

もう十年前になる。

当時、筑波大学に在職していた私に司馬さんから手紙が届き、よいジャーナリストを育てるために、明治中期に新聞〈日本〉を創刊し、自らも〈国民論派〉と呼ぶ中道主義の言論活動を展開した

陸羯南についての〈講座〉を設けてはどうか、という提案があった。

司馬さんからの私信を公開するのには、いささか憚りがあるが、彼がいかに羯南に入れ込んでおり、その提案がいかに念入りなものであったか、を知ってもらうために、一部を紹介することにする。

たれか、講師をよんできて、

〈陸羯南と新聞日本の研究〉

というのをやりませんか。

数人が、講師（臨時の）をやって、共同研究式にやって（多分に啓蒙的でも可）、大学の出版局から、軽装の本を出したらどうでしょう。

〈陸羯南と新聞日本の人々〉

でもいいです。もしおやりになるなら、小生、学問的なことは申せませんが、子規を中心とした〈日本〉の人格群について、大風に灰をまいたような話をしてもいいです。露はらしいの役です。

私は〈ぜひやりたい〉と返事をし、数人の研究者を語らって準備を始めた。司馬さんはその後も、隠れた研究者を紹介してくれたり、参考資料やその入手先の電話番号まで知らせてくれたりという気の入れようだった。

明治の大新聞の磁場の中心人物

司馬さんは羯南を〈明治時代きつての偉材の一人〉（街道をゆく―北のまほろば）と評しているが、その理由は二つ考えられる。

一つは、正岡子規をして〈徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ〉といわしめた人徳への傾倒である。

もう一つは、福本日南、池辺三山、鳥居素川、三宅雪嶺、長谷川如是閑といった明治後期の文章家、思想家、言論人が〈日本〉に拠り、やがてその多くが朝日新聞に移って今日の新聞ジャーナリズムの基礎を築いたことへの評価だ。

司馬さんは、私への手紙の中でこう述べている。

〈羯南はえらいですが、磁石としてのえらさで、その磁場にあつまっていた鉄片たちが重要かと思えます。というより、そういう〈羯磁場〉とは何か、ということです。……明治の大新聞の中心的人物で、磁場をつくりえた人はいたろうかとふと考えています。やはり羯南でしょう。〉

最後の大河小説準備したのでは

こうした司馬さんと私とのやりとりを踏まえ、しかもB君の〈ジャーナリストを小説に……〉という鋭敏な発想を耳にしての私

なりの推論だが、司馬さんは、陸羯南と新聞〈日本〉の人々のいわば明治の知識人の孤愁といったものを通して、〈日本・日本人〉に迫ろうと、すでに〈坂の上の雲〉に続く大河小説の準備を終えていたのではないか。しかし、〈小説はもう無理だ〉という自覚から、せめて凡庸な私を助けて教壇から若者たちに、新聞ジャーナリズムについて伝えようと考えたのではなかったか。

仮にその推理がマト外れでなかったとしても、司馬さんの真意を見通せなかったおのれの不明を恥じるしかないであろう。

さらに重大な後悔は、せっかくの司馬さんの提案を実現できないままに、彼をおくってしまったことだ。準備段階で私が一時体調を崩したことで研究者仲間の足並みがそろわなかったためである。

〈陸羯南のこと、ぼちぼちでいいではありませんか。小生のたわごとが、余計な手荷物をふやしたようで、痛みいる次第であります〉という司馬さんの寛容さに甘えて今日に至ったことをどう詫びたらいいのか。私としては〈司馬さんと新聞〉という手荷物ならぬ重い荷物を背負って歩き続けるしかないと思っている。

〔司馬遼太郎さんと新聞〕 産経新聞 一九九六年三月二十七日二十八日）

「坂の上の雲」の続編を準備していたのでは、という青木教授の推論だが、司馬氏との約束を果たせなかった斬鬼の念があふれている。

更に、中央公論の特別号には、より明確な形で、羯南研究への決心を書いていた。

陸羯南への思い

～司馬遼太郎の足音～

私は、畏友司馬遼太郎の友誼の深さと、それに応えられなかった私自身の俯甲斐なさについて書く。

「講座・陸羯南」の手紙

「国民作家」としての司馬遼太郎さんは、清廉で透きとおったリアリズムを持つ「明治国家」の成立とその発展のシンとなった人びとに、ほお擦りしたいほどの親しみと愛情を抱いていたように思われる。

終生新聞記者魂を失わず、「座談の名人」ともいわれた司馬さんは、とりわけ正岡子規、夏目漱石、福沢諭吉、陸羯南、池辺三山といった文人、言論人とは、夜を徹して語り合いたい思いが強かったのではないが。

それには、私なりの理由がある。

私は、司馬さんと新聞・新聞記者観を共有したつもりでいる。いや、私が「感染」したといったほうが正確だろう。ごく凝縮していえば、彼は、新聞ジャーナリズムが近代日本の浮沈に深くか

かわったという認識から、その現状と将来に「英知」(Wisdom)を求めてやまなかった。また、新聞記者には「無償の功名主義」という戦国忍者に共通する透明な職業意識を期待していた。

(中略)

実は、そんな彼からのせつかくの提案だったが、準備段階で、私が一時期体調を崩したり、研究者仲間の足並みが揃わなかったりして、一日延ばしにするうちに、司馬さんをおくる破目になった。しかも、私のその怠慢に対し彼は、「陸羯南のこと、ぼちぼちでいいではありませんか。小生のたわごとが、余計な手荷物をふやしたようで、痛み入る次第であります」とまで気をつかってくれていた。実に慚愧に堪えないのである。

だが、司馬さんからの「宿題」は果たせなかったものの、その下準備の過程で、「なぜ司馬さんは陸羯南や『日本』に傾倒したのか」「なぜ羯南のもとに多くの偉材が集まったのか」「なぜいま羯南なのか」といった問題意識を、私なりに持てたのは大きな収穫だった。さらに、その問題意識から、改めて司馬さんに対する私の理解も深まったように思えてならないのである。

子規、羯南への愛惜

司馬さんは、正岡子規を介して陸羯南と「呪懇」になったと考えられよう。その子規と司馬さんとは、古い「馴染み」だったら

しい。『坂の上の雲』第五部の「あとがき」にこうある。

「私は少年のころ、父の書架に正岡子規と徳富蘆花の著書またはそれについての著作物が多く、つい読みなじんだ」

この「あとがき」では、蘆花と対比しながら明晰な「子規論」が展開されている。

「正岡子規の場合はかれ自身の美学で日本の短詩型の価値観を再編成してその後の系列の大宗となったということで様式史の位置が明快すぎるほどに明快だが、実際の組織世界においては大宗の位置に虚子がついた。この師承の世界にあつては子規の影は師承の系列が枝わかれしてゆくにつれていよいよ薄くなっている。

子規と蘆花の共通点は、かれらにとつて後世であるこんにち、ただ一点だけある。かれらのものが読まれたいということである」

「子規の散文は、平明達意な日本語を成立せしめたという点でもその価値が大きい。この使命意識のつよい人物が平然として短命に甘んじたということは、かれの文学者としての課題以上に人間としての大きな課題をもっている。しかしそれ以外の点では、子規は、たとえば蘆花のような特異な精神体質などももっていないかった。子規はごくふつうの人であった」

「少年のころの私は子規と蘆花によって明治を遠望した。蘆花によって知った明治の暗さにひきかえ、金銭にも健康にもめぐまれず、癌とおなじく死病とされた結核をわずらい、独身のままで死んだ子規の明治というものが底ぬけにあかるかったのはどうい

うことである。……かれは開明期をむかえて上昇しつつある

国家を信じ、らくらくと肯定し、自分の壮気をそういつ時代気分の上のせ、時代の気分とともに壮気がふくらんでゆくことにすこしの滑稽感もいだが、その若い晩年において死期をさとりつつもその残されたみじかい時間のあいだに自分のやるべき仕事の量の多さだけを苦し、悲しんだ。客観的にはこれほど不幸な材料を多く背負いこんだ男もすくなかつたろうが、しかしこの男の楽天主義は自分を不幸であるとはどうしても思えないようであった。明治というこのオプティミズムの時代にもっとも適合した資質をもっていたのは子規であつたかもしれない。

長い引用になつたが、司馬さんの子規への熱い思いと「明治」への透徹した洞察がうかがえよう。この子規好きが『坂の上の雲』という彼の代表作に結晶したのだ。司馬さんはいう。

ある年の夏、かれがうまれた伊予松山のかつての士族町をあるいていたとき、子規と秋山真之が小学校から大学予備門までおなじコースを歩いた仲間であつたことに気づき、ただ子規好きのあまりしらべてみる気になつた。小説にかくつもりはなかつた。調べるとつれて妙な気持になつた。……

(『坂の上の雲』第一部「あとがき」)

その子規が短い生涯の中で、「陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙ガ出

ルノダ、徳ノ上カライフテ此様ナ人（余リ類ガナイト思フ）（夏目漱石あての手紙、明治33年2月12日）とまで慕ったのが、叔父の加藤恒忠（拓川）の司法省法学校以来の友人である新聞「日本」社長の陸羯南だった。

（中略）

加藤恒忠は渡仏するにあたって、子規を羯南に託す。羯南は東京帝大国文学科を中退した子規を「日本」に入社させ、住居も羯南宅の隣家に移転させ、生涯にわたって面倒をみることになる。

子規が、

『羯南翁』

というとき、涙のにじむような感情がつねに湧いたという。

……病中、痛みのために号泣するとき、竹藪のむこうからやってくる翁（といっても当時、四十代であった）が枕頭で『よしよし』とつぶやきつつ子規の手を握ってくれていると、ふしぎに痛みがやわらいだ。

このことについては、当時、虚子、左千夫、および碧梧桐の三人が看護番として共同で執筆した『病林日記』（看病日誌といふべきもの）にも触れられている。この日も、羯南が隣りから様子を見にきたのであろう。

羯南翁八帰ラレタ……アト子規君ノ話ニコノ間某新聞ニメスマリズム（註・動物磁気説 患者との接触により・患者の体内

へ一種の磁気を注入するというやや神秘的な学説・治療法）ノ話ガアツタガアレト同シ事デ羯南翁ノヤウナ感情的ナ人ニ手ヲ握ツクリ額ヲ撫デタリシテ眞フト神経的ニ苦痛ヲ忘レル……

とある。子規のいう感情家とは、感情が固有に多量な人をさすかとおもわれる（『ひとびとの聲音』）

私の知るかぎり、司馬さんも羯南に劣らぬ「感情家」であると思う。だからこそ司馬さんは、子規については全集の監修まで引き受ける。そして子規の生涯のよき理解者である羯南に対しては、「私は羯南が明治時代きつての偉材の一人だとおもっている」といいきるのである。

私の二つの推論

司馬さんは、前に述べたように私への手紙の中で、「陸羯南と新聞「日本」の研究」を、「陸羯南と新聞「日本」の人々」でもいいと念を押し、自ら「子規を中心とした『日本』の人格群」について話をしてほしい、と記している。このことは、司馬さんを知るうえで重要である。

司馬さんの提案に依って私が共同研究の組織づくりを始めたころ、彼からこんな私信が届いた。「陸羯南と新聞「日本」の人々」の主題といえるものである。

「羯南のもとに、なぜあれだけの人材がしかも数多くあつまっ

たのか、給料は『朝日』『国会』の半分だったのに、どういことか、明治の知識人の「孤愁」というものを感じます。羯南の社は『多少の給料も出るサロン』だったのではないか。それに単なるサロンではなく、だれもが、憂国家だったことに共通頂があります。軽薄な民権論や気どった文明開化主義や、赤い屋根にあらざるだけの明治的プロテスタンティズム（むろんニトベやウチムラはちがいます。その亜々流の意味）といった明治三十年前後の知識層からも離れた人々というカッコにも組み入れられそうです（筆者注・「ニトベ」は新渡戸稲造、「ウチムラ」は内村鑑三のこと）

「羯南はえらいですが、磁石としてのえらさで、その磁場にあつまっていた鉄片たちが重要かと思えます。というより、そういう羯南とは何か、ということ。羯南という人間（人格、教養、精神）の研究よりも、磁場をつくる人間とは何か、という研究です。明治の大新聞の最後である『日本』、それがなぜよき最後たりえたか、それは羯南の磁場ではないか、そして羯南の死とともにかれらが他へ移ってしまう。」

明治の大新聞の中心的人物で、磁場をつくりえた人はいたろうかとふと考えています。やはり羯南でしょう」

もはや多言を必要としないほどの羯南観であり、羯南の灯に吸い寄せられた人々についての明察である。いま振り返って当時の私の怠慢を言い訳すれば、司馬さんのあまりに的確な分析の前に

手も足も出なかったことが挙げられるかもしれない。

以下は私の推量である。

一つは、『坂の上の雲』以後の司馬さんの文学的課題についてだ。

司馬さんは「二十二歳（敗戦当時）の自分への手紙」として小説を書き続けたという。その意味でいえば、「明治国家」の「建設記録」である『坂の上の雲』のあとには、不幸な倒壊記録が綴られて当然であった。事実、彼が「私にとって戦車という機械は昭和十年代の日本国そのものであった」（「石鳥居の垢」という戦中の「戦車兵」体験から、昭和十四年の「ノモンハン事件」をテーマに選び、準備を進めていたことは、すでにかなり知られている。

だが、司馬さんは、ついにノモンハンの敗戦を小説にはしなかった。「小説を書いたらボクは死んでしまう」というのが理由だったが、私は、彼の口から直接に「資料も関係者の話もできなかぎり集めたが、書くとなると、統帥権に真つ向から取り組まざるを得ない。それにはまだ時機が早い」とも聞いた。いずれもウソではなかつたらう。

では、昭和62年の『鞭鞭疾風録』を最後に小説の筆を折った司馬さんは、『坂の上の雲』に続く大河小説を構想していなかったのだろうか。彼の「二十二歳の自分への手紙」の中には、日露戦争までの明るい「明治国家」を暗転させた時流の「解説」が欠け

ているのではないか。「精神にも体力があるのです」（「開高健への弔辞」）ということは理解できるとしても、「ノモンハン事件」以外に、テーマだけでも持っていなかったのだろうか。

司馬さんが亡くなったあと、生前の彼の信頼が厚かった某誌の記者からこんな話を聞いた。

「ボクも司馬さんに小説を書いてほしいと頼んだことがありません。日本という国家の浮沈を追うには、軍部のほかに新聞ジャーナリズムも欠かせないはずです。新聞記者出身の司馬さんにぜひジャーナリストを主人公に小説を書いていただきたい、って。でも、やっぱり『小説はダメだ』と断られました」

この打ち明け話から私なりに思い当たったことがある。あくまで推論だが、司馬さんは、陸羯南と新聞「日本」の人々の、いわば明治の知識人の孤愁を通して、「日本・日本人」に迫ろうと、大河小説を構想していたのではないか。しかし、「小説はもう無理だ」という自覚から、せめて凡庸な私を助けて教壇から若者たちに、新聞ジャーナリズムについて伝えようと考えたのではないかと。

司馬さんは、羯南に関する資料集めの協力を約束した私信を、「ジャーナリストは、国文学にも政治学にも所属しません。青木研究室にしか安住の所なし。右、羯南を大学の研究室に入れたくもあって、懸命の文章であります」と結んでいる。私には、羯南がすでに、司馬さんの中の坂本竜馬や土方歳三や子規や秋山兄弟

と並ぶ存在だったように思われてならないのである。

もう一つは、新聞・新聞記者に対する理解と愛情の深さについてだ。いささか楼小化していえば、司馬さんと私とが共有した「産経」に対する「喜怒哀楽」が、羯南と新聞「日本」の人々への想いを熱くしたのではなかったか。

「産経」は「私」の強い経営トップの専横のために、新聞ジャーナリズムがゆがめられたり、成長の芽を摘み取られたりした不幸な歴史を持つ。だが、そうした逆境にもめげず、後輩の社員たちの努力で今日、まがりなりにも報道や論評で独自の道を切りひらいてきていることは周知のとおりである。

考えてみると、司馬さんが私に羯南研究を奨めたのは、外部から招かれた経営トップが「産経」を「私」し尽くした時期と重なり合う。司馬さんは羯南と新聞「日本」の人々を改めて世に出すことで、産経の経営トップを戒め、後輩たちに子規をはじめ「日本」の記者たちのジャーナリストとしての「志」を継ぐよう励ましたかったのではないか。

余談になるが、私は戦後の代表的新聞人である「朝日」の笠信太郎さんが語った「新聞経営者像」が好きである

（「新聞経営のリーダーシップ」）。

「新聞を経営する責任者は、経済的経営という一般の企業と共通の側面をふくめて、社会にむかって広く胸をひるげ、この重大な

仕事に責任を問われることに十分に堪え得る人でなければならぬということになる」

「新聞は人間の知性を作る。人間は信によって生きる。同僚お互いの信頼性、また上下の信頼性がなかったならば、新聞らしい新聞はできない。そこで、何よりも最高責任者が、経営技術家ではなく、社員全体のおのずからの信頼を受ける見識の人でなくては、立派な新聞はできそうもないと私は思う」

私は、笠さんのいう新聞経営者の理想像に羯南が最も近いと思う。おそらく司馬さんもそう感じていたにちがいない。

新聞「日本」に託したもの

与えられた紙数が尽きかけているが、最後に、いままぜ陸羯南と新聞「日本」か、について触れておかねばなるまい。

司馬さんが、子規の才と志をどんなに愛し、その子規を含む「日本」の人々が羯南の人格と見識にどんなに心酔したにせよ、それだけでは、二十二歳の自分への最後の手紙を、私ごとき者に託そうとしたとは思えないからである。

二つのことが考えられる。

まず、本来「公」とみなされるべき土地を「私」して利益をむさぼるといふ土地バブルに象徴される現代の日本の日本人に対する怒りの大きさと絶望の深さが挙げられる。戦後、次第に増幅さ

れてきた「私」に対する司馬さんの憂いは、身近にいたみどり夫人の次の回想（「夕刊フジ」平成8年6月29日付）からもうかがえよう。

「最晩年の司馬さんは毎日、毎日、住専と夏目漱石の話ばかり。漱石は三四郎の言葉で『この国はもう死んだ。明日はない』というのがあるんですね。もうあんまり言い続けるものですか、私一人より、もっとだれか話しごたえのある人に聞いてほしいなという思いがだんだん強くなってきたんです」

司馬さんは自らを、欧化主義の沿々たる流れに抗した羯南や新聞「日本」の人々の間に置いていたにちがいない。

また、司馬さんが親しみ愛し続けた紙の新聞の未来に対する危機感の大きさも想像できる。多メディア・多チャンネル時代に新聞が生き残るには、新聞「日本」のような純度の高い「高級紙」路線しかないのかもしれないという問題提起を指摘したのでらうか。

私をはじめ日本人は、司馬さんがのこした手荷物ならぬ重い荷物を背負って生きねばなるまい。

そのゆくえを気遣いつつも、天に還った司馬遠太郎は、いま子規や漱石や羯南や論吉らと心ゆくまで語り合っていることだらう。

（『陸羯南への思い〜司馬遼太郎の足音〜』 中央公論社 一九九六年）

青木教授から、羯南の関係の資料収集の依頼を受けたのもこの頃であった。

筆者自身は、陸羯南という人物の名前は、高校時代、岩波文庫のあらたな百冊が選ばれた中に代表作の「近時政論考」が入っており、一読した覚えがあるくらいであった。

当時は、今の様にネットが普及した状態ではなかったため、中央公論の日本の名著にあつた読書案内の参考文献の書籍を集めるのに、神保町、早稲田、本郷と一軒一軒歩き集めたのが思い出される。

青木教授は、司馬氏没後、司馬遼太郎財団の設立に尽力されながら、多忙の中、弘前を訪ねたり、関係者にお会いしたりして羯南を形にしようと努力された。

ここに当時、新書を出そうとして、編集者と青木教授が作成した目次の案がある。

陸羯南と新聞「日本」（仮題）

1. いま何故、陸羯南か
- ・ 現代日本の思想状況と羯南
- ・ 今日のジャーナリズムの危機と羯南

2. 陸羯南の人と思想

- ・ 羯南という人―その生い立ちと青春放浪
- ・ 羯南の友人群像―加藤拓川、原敬、福本日南、国分青崖ら
- ・ 思想史の中の羯南―文明開化と国民主義と国粹主義
- ・ 「近時政論考」「原政及国際論」などを読む

3. 陸羯南と新聞「日本」

- ・ 最後の大新聞「日本」の盛衰
- ・ 羯南の新聞、新聞記者論

4. 羯南と新聞「日本」の人々―その人格群

- ・ 羯南人脈と現代ジャーナリズム
- ・ ジャーナリストは羯南に何を学ぶべきか

だが、そうした中、青木教授も病に倒れ、二〇〇三年十二月に急逝されてしまった。

結果的に最後となった青木教授の入院の前、私達、教え子は自宅に集まり、先生からいくつかの宿題を頂いた。

先生から頂いたいくつかの宿題の中に、未完になってしまった陸羯南研究があつた。

この陸羯南研究会は、司馬氏、青木彰教授と受け継がれてきた研究を、私たちに形にしようという取り組みである。

当初、研究会を始めたものの、どこから手をつけて良いかわからなかった。まずは、青木教授が残されたノートをもとに、先生が会われた方にお会いしたり、取材に行かれた羯南の生地、弘前に行ったりして、試行錯誤を繰り返した。

司馬氏の残された手紙にあるように、「数人が、講師（臨時の）をやって、共同研究式にやって（多分に啓蒙的でも可）、大学の出版局から、軽装の本を出したら」というプランに従って、羯南とその関係の主要な人物の研究者の先生にお願いをして研究会を開いてはどうかと考えた。

このプランを同じ筑波大学の先生にご相談したところ、それでは、青木教授の目指していらしたことがなかなか実現しにくいので、やはり、青木塾のメンバーで少しずつでも形にしていって、というアドバイスを頂いた。

ではまず羯南のオリジナルの資料から、ということ、御子孫の皆様のもとに残されている資料を拝見していった。

2. 陸羯南研究会のブログ

こうした活動をしながら、少しずつでもわかってきたことを、どのように記録していくかが問題となった。一つには、研究会のメンバーの多くが現役のサラリーマンであったことから、なかなか全員で集まる機会をつくることも難しいこともあって、情報の共有化をはかるた

めにも、ブログを作ろう、ということになった。

以下が、記念すべき第一回のブログである。

陸 羯南研究のブログ開設しました

高木さんと行った弘前へ陸 羯南の生地を訪ねる旅の途中で「ブログ作ればいいじゃん」という軽いノリで言ってしまった一言が運のつき。

「じゃあ作って」といわれ、ご覧のようになりました。

執筆陣は高木主筆より分担を任じられた各位にて、それぞれの研究成果を発表するもよし、新たな発見を投稿するもよし、身近な出来事を書くもよし。陸 羯南に少しでも関わることであれば歓迎です。

このブログは公開しまして、同様の研究者の目に入ることを期待します。

またコメント、トラックバックもオープンにしまして、皆さんのご意見やリンクを期待します。

（スパム防止のため一定の制限を加えています）

複数の執筆なので、文末に名前を記入します。実名（性のみ）原則ですが、事情により匿名も可とします（その場合、執筆人内には誰であるか明らかにしてください）

なお下写真は11/23ホテルから眺めた弘前の朝です。最高気温

六度。雪もちらつく天気です、昼からアルコールの助けを必要とした由。寒ッ!!
続報は後日。

つかもと

上記が、記念すべき第一回で、二〇〇六年十一月二十五日、羯南の生地、弘前では、ちょうど一年後にひかえていた、没後百年の記念行事が準備されていた時期にあたる。

羯南と新聞日本関係の人々に関する情報などを勉強しながら、順次載せていくという、研究会の備忘録的なノートのような存在であり、改めてふりかえると研究会の簡易日誌となった。

3. 最初の関係資料の復刻

(1) 日本画報

上記にもある、弘前、青森での記念行事で準備されている資料を拝見していて、面白いなと思ったのが、日露戦争期に、新聞日本の付録として発行されていた「日本画報」であった。青森県立近代文学館所蔵の資料だったが、部分的なもので、どこかで全体を見れないものかと探した。

日本画報、をキーワードに、ネットで検索していくと、ふと富山の

北日本新聞の記事が目にとまった。

明治の息遣い見に来て 内山邸で「日本画報」展示 北日本新聞
2003年4月28日朝刊

富山市宮尾の県民会館分館「内山邸」で見つけた明治時代の報道写真をまとめたタブロイド紙「日本画報」の複写の展示が、28日から同分館で始まる。

日露戦争の戦地の様子や女性の流行のファッションなど、明治時代の人々の息遣いが伝わる。

日本画報は日本のジャーナリストの先駆者、陸羯南（くが・かつなん）が明治22年に創刊した新聞「日本」が、付録として明治37年から月2回発刊していた。

同分館では職員が1月に蔵の中を整理していた際、日本画報36号分が保管されているのを見つけた。富山市東中野町の相馬登美さん(87)宅でも、第1号から42号までがまとまって見つかった。

展示される複写は、同分館で見つけたものに加え、相馬さんの協力を得て複写した明治37年6月6日発行の第1号から同39年10月21日発行の第42号まで。

日露戦争で大砲を放つ兵士や、流行の髪型と服装を身にまとったほほ笑む若い女性、ゴルフやテニスを楽しむ学生などの写真が各号にテーマごとに掲載されている。

複写は常設展示され、山本勝昭分館長は「明治時代の人々の息

遣いが手に取るように分かる。ぜひ多くの県民に見てもらいたい」と話している。

第1号から第42号までとあるのを見て、実物を確認するために、富山の学校の教員をしている友人と一緒に富山駅にほど近い豪農の住居の記念施設を訪ねた。

富山 内山邸 〈日本画報〉のこと

〈日本画報〉は、かめたに君が、青森近代文学館の部分で紹介してくれているように、新聞日本が、日露戦争旬報の発展型として、明治37年6月からほぼ月二回のペースで発行していた附録誌である。8ページの構成で、特徴は日露戦争開戦時から実験的に新聞紙面にとり入れた写真中心のグラフィ誌であることにある。羯南が新聞日本を手放すまでに40号が発刊された。附録という位置づけであったことから、新聞日本の復刻版には掲載されておらず、国会図書館にも所蔵されていない。青森で現物を拝見してから、一度全体を見てみたい、と思っていた。

富山のながい先生から、この〈日本画報〉が、富山県民会館分館である〈内山邸〉というところに展示されている、と教えて頂き、足を運んだ。

内山邸は、富山駅から車で10分程度、越中の豪農の館がきれいに保存されている。

2003年、内山邸の蔵の整理が行われた時に、この〈日本画報〉がまとまって、発見された。創刊号は欠落していたが、これも偶然だが同じ富山市内の個人の方のところからも同時期にみつかったことから、創刊号から42号（経営が変わった後も発行は続いていたようだ）まで、まとまって展示されていた。

初期の号は、日露戦争旬報の延長線上にあったので、基本的には日露戦争の進捗を写真的に報道した内容が中心であった。これが、徐々に、多岐多様な方向に展開していったのである。

（陸羯南研究会ブログ 二〇〇七年十月十四日）

同じ富山にこれも偶然だが、北日本新聞勤務の方の先祖の方が、海外勤務の際に収集されていたものが日本に持ち帰られ、そのまま自宅に保存されていた。こちらは、北日本新聞の新聞博物館に寄贈され、所蔵されていた。

資料の復刻については、青木教授のご後任だった天野勝文教授に相談し、陸羯南の伝記の作者でもあられた有山輝雄東京経済大学教授をご紹介頂いた。

有山教授の御推薦で、学術資料専門の出版社であるゆまに書房を推薦頂き、復刻に向けての準備が始まった。

『日本画報』は、陸羯南が主筆兼社長を務めていた新聞『日本』が、日露戦争中に附録として発行していたグラフィ誌である。

第一号は、明治三十七年六月六日に発行された。

当初、毎月の第一、第三月曜日に発行されていたが、途中から不定期の発行となり、現在では陸羯南が伊藤欽亮に新聞を譲渡して以降に発行された第四十一号（明治三十九年八月十五日）、四十二号（同年十月二十一日）までの発行が確認されている。

平成十五年一月、富山の豪農・内山氏の自宅（現在、県民文化会館分館となっている）の蔵で第一号から第四十号（但し第十七号、第三十五号、第三十六号、第三十九号は欠）が発見された。さらにそれをきっかけに、同市の個人宅から、その家の祖父の遺品として第一号から第四十二号までがまとまって保存されているのが確認された。この一揃いは後に所蔵者の希望で北日本新聞博物館に寄贈され、現在同館で一部が公開されている。

また、平成十九年に陸羯南没後百年を記念して青森近代文学館で開かれた「陸羯南と正岡子規」展を機会に、同館が第一号から第三十九号（但し第二十七号、第二十九号が欠）を収蔵、その展覧会でも一部が公開された。

現段階で、まとまった形で所蔵、保存が確認されているのはこの三館だけということになる。

日本画報の構成は次の通りである。

- ・ 発行期間 明治三十七年六月六日（一号）から明治三十九年十月二十一日（四十二号）
- ・ 大きさ タブロイド版
- ・ 紙面構成 八ページ構成（特大号 十二ページ）

・ 表紙（一面） 絵画、写真

・ 発行形式 本紙月極購読者への提供品（別売の場合 一部 十銭）

・ 印刷所 成章堂

・ 写真の入手ルート 紙上には記述がなく、現状では確定できない。

『日本画報』の成立には、前段階があり、まず『日本附録週報』・『日本附録』が、附録として製作されていた。

政論新聞として、陸羯南の社説が一つの目玉となっていた新聞『日本』は、日清戦争時期の発行部数二万部強がピークであった。その後、新聞の大衆化の波にのらなかったために、その発行部数は長期的な低落傾向にあった。

この低落に歯止めをかけるために、編集部は種々の方策をうったが、その一つに『日本附録週報』（明治二十八年六月十日）という附録の発行があった。この『日本附録週報』は、毎週末に一週間の主要な記事をまとめたダイジェスト版ともいうべき附録誌で、そのまとめとしての便利さが人気を呼んだのか、「目下週報のみを購読する者百余名に有之候」（『陸羯南から近衛篤磨宛書簡 明治三十四年十二月二十七日』、『陸羯南全集』第十巻、一九八五年四月、みすず書房、三八頁）というほどの、売り物の一つとも言える存在となっていた。明治二十八年六月十日の第一号は、4面構成となっていた。

一面 政治及外交、法令、叙任及辞令、陸海軍、玉石同架

二面 公議一斑

三面 財政、農工商、教育、地方近事、詞苑

四面 外報、彙報、新刊雑誌

一面の玉石同架は、新刊書籍の三行紹介、今でいう書評欄のコンパクト版である。

二面の公議一斑は、この一週間に他の新聞各紙に掲載された主要な社説のダイジェストであり、先ごろ、大手新聞三紙がネットで似たようなことを始めたが、一目にしてその週の言論の方向がわかり見事な構成となっている。

四面の、世界各国のニュースをまとめた外報に続く、彙報は、はみ出しニュース的なコラムで、政治家の動向がらみの記事が多いが、中には拾い物の記事もある。最後には新刊雑誌の一覧もついている、という至れり尽くせりの内容でたしかに読者には便利なダイジェストであったのだらうと思われる。

その後、明治三十五年、近衛篤磨からの資金援助を受ける際に、それまで近衛が発行していた雑誌『東洋』と合併話が持ち上がった。

その合併直前には、『日本附録週報』の紙面構成は、創刊以降の何回かの改良を経て八面の構成になっていた。

一面 日抄、法令、叙任及辞令、時論、教育、天気

二面 外報、議會、宗教

三面 つばすみれ、天籟

四面 藻林、雑録

五面 隨筆

六面 雑録

七面 外電、日本青年会

八面 広告面

隨筆、更に独自の広告までとる、堂々たる別冊の媒体に発展してきていた。

ここにある「日本青年会」は、新聞『日本』の青年層の読者を中心とした愛読者組織で、ここはここで独自の冊子をつくるころまで、成長してきていた。

前掲の陸羯南から近衛篤磨宛書簡（明治34年12月27日）によれば

霞山公閣下

追て、昨日御下付の原稿は寄書として掲出致恨。是は文章も何応多少前者と殊異の点あればなり。御承知願上候。

第二項 日本新聞社は自今週報日本を日本附録と改題し其初欄を東洋として雑誌東洋の材料を掲載すべしと修正したし。

拝誦仕候。契約案第一第二の東洋一件八聊御注文通に致兼候事情有之、是は拝芝の上に御話可致候へとも、先大要八左に。

一、日本週報を東洋と改め候事八従來の読者二唐突の感を与ふるのみならず、記事にも幾分の制限を加へらるゝことを免れず。

目下週報のみを購読する者百名余に有之候二付、願くは是も繋止め度し。

一、五百木及他人を引受候而猶此週報ヲ多少改良するに付ては、

毎月百円位の増費を免れざること。

右一ヶ条の事由二付、当方本人と協議の末、更に左の事を御承諾願度候。

一、題目を日本附録として其第一欄に「東洋」といふ現在の文字を其儘二縮写して置き、

一、大抵初の四ページをば全く東洋の領分と為し、一次の四ページは迄の週報領分と為し、之に従来の週報材料を入れ、

一、経緯社は社名ら此際全く廃すること、

一、右増費の填補として負債の利子中少くも百円は当分融通を許さること、

右予め申述置候間、御賢考に預度候。

其他の諸条は何れも異存無之候。

此週報処分一件は「日本」其物の盛衰にも関するものなれば、其点も御賢考ありたし。

右の如く致度考に御座候。

先は不取敢御考案の為め大要如此。

〔明治三十四年〕十二月廿七日 草々頓首

実

（「陸羯南から近衛篤磨宛書簡 明治三十四年十二月二十七

日」、『陸羯南全集』第十巻、一九八五年四月、みずす書房、三八頁）

このようなやりとりが羯南と近衛篤磨との間でかわされており、五

百木良三が編集にあたっていた『東洋』との合併の話の延長線で、編集に立ち入ってくるような事態にもなっていた。このタイミングで『日本週報』は『日本附録』と改題となり、『東洋』欄が前面に出てくることになって、『日本附録』と改題された。

『東洋』と合併後の『日本附録』の紙面構成は、

一面 「東洋」 時論

二、三面 雑録

四面 漢文による時論

五面 英文による時論

六面 雑録

七面 外電、時論、天気

八面 日抄、法令、叙任及辞令、議会、歌・俳句

（明治三十五年一月十三日 『日本附録』）

となつて、『東洋』との合併によつて、前面に雑誌的な論説、読み物が進出してきている。

これは、新たな出資者である近衛に対する気遣いのあらわれであるう。

注目されるのは、英文、漢文のコラムが入っていることである。一面にある「日本、東洋併刊の辞」によれば

従来『東洋』は時に漢文又は英文を以て東洋問題の解決を試み、支那朝鮮又は其他の外国の識者に一読を求めたり。

（明治三十五年一月十三日 『日本附録』）

雑誌『東洋』は、海外の読者を想定していたのである。またその翻訳については「日本」の週報は今日の合併あるを機とし「東洋」に關係ある記者に囑して今後成るべく漢文又は英文の掲載を進行すべし。（明治三十五年一月十三日 『日本附録』）

としており、『東洋』にいた人材が対応していた。

この日の英文のコラム「China And Russia」は、一月八日の『日本』の社説を翻訳、縮訳したものである。

明治三十七年二月八日の紙面構成では

- 一面 「東洋」 時論
- 二面 雑録
- 三面 病中の霞山公、俳句
- 四面 漢文による時論
- 五面 雑録
- 六面 雑録、日抄
- 七面 時論
- 八面 外電

（明治三十七年二月八日 『日本附録』）
となつてゐる。

その年の一月に亡くなった霞山公近衛篤磨の最後を連載した隨筆が目につくが、その他は英文の時論がなくなった程度で大きな変化はない。漢文は残つたというのは、それを読む読者層がいたということであらう。

(2) 『日露戦時旬報』

この『日本附録』は、明治三十七年二月十一日、日露戦争が勃発すると、戦争報道へのニーズの高まりを受けて、再び『日露戦時旬報』と改題され、それ以降は、十日おきに一冊の頻度で発行された。以下、その際に新聞『日本』に載つた「社告」を掲げる。

社告

附録戦時旬報

従来の『週報』は受持記者軍事通信の爲め特に朝鮮京城に出張したるに付き此際之を廢刊し更に右代りとして『戦時旬報』を毎十日に附録として読者に配布することゝ爲し本日即ち十一日の本紙より始めたり旬報は戦時の事項を簡明に接続記載し別に旬評その他毎回戦事に関する画を挿入し又従来週報の如く十日間の出来事を日抄又は電報として集録す本日附録の旬報は突嗟の間に編集したれば不完全を免かれざるも次号より完成して他日戦時史の資料と爲すとを勉めん

（『日本』明治三十七年二月十一日、第五二一九号、第一面）
ここで関心を惹くのは、既にこの「旬報」の段階で、「画を挿入」することを企図していること、即ち、これまでの比較的活字一本であつた紙面構成から一步抜け出すことを企図していること、くわえて、記録性という側面からも「他日戦時史の資料と爲す」という意図を持っていることである。

また、後日には『戦時旬報』のみを要する向には本紙共一部金式

錢五厘にて貴需に應ずべし」(『日本』明治三十七年二月二十四日、第五三三二号、第一面)と、別売りもはかつていた。

・発行期間 明治三十七年二月十一日(一号)から明治三十七年五月二十一日(十一号)

・大きさ タブロイド版

・紙面構成 ハページ構成

・挿絵 肖像絵画、写真

・発行形式 本紙月極購読者への提供品(別売の場合 一部 二

錢五厘)

・印刷所 成章堂

その紙面構成は、

一面 旬評、日抄

二面―七面 旬報

八面 外電

となっている。『戦時』と題していることもあり、内容は日露戦争の記事に集中している。挿絵は当初、イラスト風の肖像画が中心の紙面であったが、最終号の十一号には、次回の『日本画報』の試作なのか、一枚の肖像写真が掲載されている。本紙・別刷の単発附録では既に、写真掲載は試みられていたが、ここでは一枚が要塞砲兵監少将都豊島陽蔵、もう一枚は英国皇帝エドワード七世であった。

その紙面構成は、

一面 旬評、日抄

二面―四面 旬報

五面 清韓方面 ニュース

六面 敵国事情

七面 局外情報

八面 外電

と大きな変更はないものの、日露戦争を取り巻く国際環境を分類して、それぞれの動静をまとめるという工夫が見られる。

(3) 『日本画報』

この『日露戦時旬報』は、五月二十一日の第十一号まで続いたが、『日本』五月二十八日の一面には次のような社告が掲げられた。

社告

戦時旬報改良

本紙は従来毎月三回戦時旬報を附録として刷出せしが戦地及海外より写真更らに到着せしを以て此際読者諸君平素の誉顧に酬ひんが為め旬報を改めて

日本画報

となし斬新なる写真及奇抜なる絵画を精巧なる写真版に附し最も鮮明に最も美麗なる附録とし毎月二回第一第三の月曜日を期し読者諸君に頒たんとす、三回を一回に減じたるは本意にあらずと雖精巧なる写真版は紙質を選まざる可らず印刷を慎まざる可らず殊に其製版には多少の時日を要せざる可らず、是れ予め読者諸君の

高諒を請ふ所以なり、若し夫れ材料の豊富にして清新なるは方今
紛出する画報と自ら其選を異にするものあらん。

但し月極購読者以外の人にして当日の新聞を求めらるゝ人は一
部の代価十銭を申受くべし

（『日本』明治三十七年五月二十八日、第五三二六号、第一面）
ここで彼らが自ら述べているように、既に時代は「写真」の時代に
入ってきていた。

④ 『日本画報』の写真と絵画

① 『日本画報』の写真

新聞『日本』の編集長を長く勤めていた古島一雄の回想の中に、新
聞『日本』と写真の関係を述べた部分がある。

初めて新聞に写真採用

新聞に写真をいれたのは『日本』新聞が最初だ。そのころ辻とか
辻村とかいう製版所に、吉田という小僧がおつて、写真が非常に
じょうずなんだ。よく新聞社にやつて来ては何かやっていたが、
それが輪転機に写真をいれることについていろいろ考えている、
熱心なやつだったよ。何かあしをつけて、それを輪転機に取り付
けることに成功したんだ。だから輪転機に写真銅版を取り付ける
ということをやったのは、一番保守党の『日本』新聞だ。

（『古島一雄清談』、毎日新聞社編、昭和二十六年三月、毎日新聞
社、六七～六八頁）

この、吉田東洋の回想が、昭和十四年九月の陸羯南の三十三回忌の
後に開かれた関係者の座談会の中に収録されている。

私は吉田東洋と申す者で、明治三十六年に日本新聞の用命に応じ
て写真製版の事を致しました。この事は今までそこらでしゃべつ
て居りませんから、ちよつと申上げて置きたいと思ひます。それ
までも日本の新聞に画を入れることはありましたが、皆板下を画
いて、それを木板で入れたわけなのです。私を新聞社に紹介して
いたゞいたのは古島さんで、古島さんの紹介で陸先生にも御目に
かかりました。

（『日本及日本人』第三七七号、昭和十四年十月、政教社、一一
九～一二〇頁）

吉田は古島の紹介で入社したわけだが、やはり彼が編集長として結
節点の役割をはたしていたことがわかる。

日本新聞では明治三十二年に、陸先生の命令で写真を掲載するこ
との研究があつたさうですが、そのままになつて居つた。

（同書、一二〇頁）

日清戦争で戦場の記録として有益であつた写真を、かなり早い時期
から研究しようと羯南が試みていたことも、この回想からわかる。

たまたま後藤新平さんが欧州視察に行かれた時、ホテルに泊まつ
てみると、何か事件があつて、一時間後には写真入の号外が出
た。後藤さんもその迅速なのにひどく感心して居られたところ交
詢社の二階で三浦さん、古島さんなどと同席した時にその話が出

て、どうもまだ日本ではかういふ風にもその状態を見せることが出来ない、といふことであつたさうです。(同前)

この「三浦さん」とは、不平將軍の一人、觀樹將軍三浦梧楼のことである。後藤新平も種々の側面で羯南との付き合いが深く、この種のアドバイスも多かったようだ。

勿論それは必要だらう、現在の規模ぢや行くまいが、やるという考なら技術者を物色しよう、といふことで、私が参ることになつたのです。当時私は二十三歳、十七歳からはじめて漸く年が明けるところでしたらから緋の著物に木綿の紋付といふ様子でした。

お前に出来るかと云はれると、製版の技術は一通りおぼえたわけですけれども、輪転機すら見たことが無いので、新聞に印刷して鮮明に出るかどうかは、あまり自信が無い。(同前)

結果的に、既成のやり方に拘泥しない若い技術者が入つたことが功を奏したのか、新しい技術に挑戦した。

併し陸先生は、費用に構はずやつて見る、といふ御話で、早速その準備にかゝりました。何でも従来日本新聞にある機械ではむづかしい、「時事新報」にある機械なら刷れる、といふやうな話でしたが、愈々版を作つてやらうとすると、工場の者が反対した。(中略)そこで古島さんや赤石さんに御願して、赤石さんから十円金を出して貰つて、工場の方へ渡りをつけまして、市内版を出したあとで刷りにかゝつたところ、僥倖にして成功しました。間もなく日露戦争が勃発して、毎日それに対する写真が出る。それ

が動機となつて、凱旋後の大觀兵式の時には、日本新聞だけが特に許されて写真を掲げたり、觀艦式の時にも社長さんの招待状を私が御預りして行つて、その写真を出したりしました。陸先生はこの事に就ては大変力を入れて下さいまして、私はその後どうやらかうやらやつて居ります。(同前)

羯南の、新聞の新技术に対する熱心さが伝わってくる証言である。これは彼の新たな一面といふことができよう。

新聞『日本』の復刻版で、新聞紙面への写真の採用について確認してみると、明治三十七年二月二十日(第五二二八号)の一面に、「満州馬の見本」という写真が掲載されており、新聞『日本』としては、これが一番最初の写真掲載と思われる。

ここに出てくる「大觀兵式」は後述の『日本画報』第三十九号に日露戦争凱旋後の觀兵式としてとりあげられている。

尚この間に「人民新聞」の木版を彫つてみた伊東昇といふ男が、目先を変へる為に私に製版を教はつてくれました(中略)そのうちに伊東が自分の名前で印刷銅版の特許を取つてしまった。(中略)少し余事になりますが、朝日新聞社刊の「新聞講座」といふものを見ると新聞の沿革を書いた中に、日本ではじめて写真版を出したのは伊東昇で、私はその庇護を受けたものゝやうに書いてある。私の事はどうでもよるしうございませうが、これでは日本新聞がはじめて写真版を掲げたといふ事実がわからなくなりますから、ちよつとこの事も申添へて置きます。

現代において主要新聞各社は、自社の紙面における写真の採用についてどのように述べているのだろうか。

吉田東洋がここで引いている『新聞講座』を出版していた朝日新聞は、現在のホームページの中の「朝日新聞社のあゆみ」に、

1904・9・30 上野鞆特派員の戦地写真「遼陽写真報」を東朝に掲載。朝日紙面に登場した最初の写真。さんごうの淵に3人の日本兵が立ち日章旗が見える

(「asahi.com」 <http://www.asahi.com/shimbun/honrya/history.html>)
と述べている。

また毎日新聞については、

新聞本紙に写真が掲載された最初は「東京日日新聞」明治三十七年四月四日の「閉塞決死隊の二十九勇士」であり(別刷りはもっと前からある)

(長谷川明「戦争と報道写真」、『日本写真全集4 戦争の記録』、桑原甲子雄責任編集、昭和六十二年一月、小学館、一六二頁)

とされている。

読売新聞は『読売新聞発展史』(読売新聞社社史編集室編、昭和六十二年一月、読売新聞社)の中で、

わが国初の報道写真

磐梯山噴火の写真を特殊製版し、ルポ「盤梯紀行」の連載記事と

ともに掲載した。(明治二十一年八月八日付本紙)

(『読売新聞発展史』、口絵写真)

としている。この写真は、オリジナルを銅版に彫ったものであり、紙面にはその彫師の名前も印刷されている。ただしこれは写真網版ではなかったと考えられる。

歴史的な事実として、どの新聞の写真掲載が日本で初めてのものがあったかは、今後の研究を待ちたいが、新聞史上における新たな表現の獲得という意味で、大きな一歩であったことは確実である。

② 『日本画報』の絵画

初期の表紙絵、及び画報に収録されている主要な絵画は、次の通りである。

- | | | |
|-----|-----------------------------|-------|
| 第一号 | 「南山に於ける激戦 日本軍人の奮闘」 | 小山正太郎 |
| | 「水雷駆逐艦風波と戦ふ図」 | 小山正太郎 |
| 第二号 | 「南山の激戦聯隊旗手負傷交代」 | 小山正太郎 |
| | 「ペトロポウロスク爆沈図」 | 小山正太郎 |
| 第三号 | 「常陸丸の最後」 | 小山正太郎 |
| | 「得利寺の激戦 露国砲兵陣地」 | 小山正太郎 |
| | 「得利寺の激戦 露国軍団長の負傷」 | 鹿子木孟郎 |
| 第四号 | 「六月二十三日我第十六号水雷艇隊露国軍艦を襲撃する図」 | 小山正太郎 |
| 第五号 | 「露兵の苦戦」 | 鹿子木孟郎 |

- 「摩天嶺の格闘戦（吉井少尉敵の十六人を斬る）」
 小山正太郎
- 第六号 「万里遠征の情」
 鹿子木孟郎
- 「勇敢なる看護手」
 小山正太郎
- 第七号 「栃木城の激戦 藤原大尉の戦死」
 鹿子木孟郎
- 「八月十日に於ける黄海の大海戦」
 S U K O
- 第八号 「旅順剣山」
 S U K O
- 「我軍使敵の前哨に赴く」
- 第九号 「良夜の露営」
- 第十号 「旅順の混戦」 鹿子木孟郎
- 第十二号 「愛馬の訣別」
- 第十三号 「旅順砲台内に於ける敵将ステツセル」 B E G G
- 第十六号 「旅順に於ける乃木大将とステツセルの会見」
- 第十七号 「清香」
- 第十九号 「雪中の大激戦」
- 絵画は小山正太郎が中心となっており、その門下の不同舎の画家たちも多くの戦争画を寄せている。越後国長岡に生れた小山は、上京し、幕末維新期にいち早く西洋画法を学んでいた川上冬崖（とうがい）の画塾聴香読画館（ちようこうどくがかん）に入門。さらに、御雇教師フォンタネージに学んだ。東京高等師範学校の訓導に任命され、西洋画を指導。岡倉天心との間の書をめぐる論争などで、常に西洋画擁護の立場から論陣を張った。明治二十年、画塾不同舎を開き、

日清戦争に従軍。その後、浅草で日清戦争の場面を再現したパノラマの制作にあたった。

彼の没後、その門下生が中心となって、追悼集『小山正太郎先生』（昭和九年、不同舎旧友会）を編んだが、その中で門下生の一人、満谷国四郎が小山と戦争画について述べている。

戦争好きの先生は日清戦争の勃発と共に、早速従軍して平壤まで行かれた。戦争が済んで帰られた頃、浅草公園にあつた南北戦争のパノラマを描き直す事になつた。（中略）其の画は白馬に跨る支那騎兵隊が算を乱して敗走する図で、濃淡の明瞭な活動的な画であつた。（中略）パノラマは最初平壤の戦を描き、次に旅順総攻撃を描いた。

（『小山正太郎先生』昭和九年、不同舎旧友会、一八〇～一八一頁）

小山は、当時で言えば戦争画の代表的な画家の位置にあつたものと思われる。小山と不同舎の画家たちは、国木田独歩が編集をした『近時画報』、『戦時画報』にも参加しており、彼らは現代でいえば一つのプロダクション・事務所になって、各雑誌に絵画を提供していたものと思われる。小山は、結果的に日本画に対抗して洋画の地歩を固める役割を果たしたが、戦争画はその画題として最適なものの一つであつたのかもしれない。

小山は前掲の追悼集『小山正太郎先生』（昭和九年、不同舎旧友会）の年譜によれば

明治 廿七年（三十八歳） 日清戦争従軍九月二十五日平壤に戻り山本芳翠、浅井忠に会す、第五師団司令部に宿す

（『小山正太郎先生』昭和九年、不同舎旧友会、三〇八頁）

とあり、日清戦争には従軍した。一方同書の日露戦争の部分には

明治 三十七年（四十八歳） 日露戦役始まる戦時画報産まる、

先生門下生多数を率ゐて従軍す、画報は矢野文雄と国木田独歩の協力の経営なり。

（『小山正太郎先生』昭和九年、不同舎旧友会、三一〇頁）

とあり、この内容からすれば、日露戦争の際には、国内にあつて、弟子たちと各種画報向けの戦争画の製作に従事していた。

斯くして居る中、日露戦争開始となつて、先生は戦時画報に關与されることとなり、小杉、芦原、木村等の先輩は争つて従軍し、私も第八師団附として従軍した。

（横井俊造「不動舎時代から今日までの想出」『小山正太郎先生』一九八頁）

とある。同書巻末の「明治十一年以後師弟ノ礼ヲ執リタル者姓名」を参考にすると、小杉は小杉国太郎、芦原は芦原曠とわかる。木村姓は三名いて特定できない。この記述から四名以上の弟子が、日露戦争に従軍したことがわかるが、小山自身は従軍していないと推測できる。

小山は、中村不折、石井柏亭、坂本繁二郎をはじめとした多くの弟子を育てた教育者としての側面も大きい。その中で、『日本画報』

には鹿子木孟郎が小山に続いて多くの作品を寄せている。

鹿子木は、岡山市に生まれ、明治二十年松原三五郎の天彩学舎に入學。明治二十五年、上京して、小山正太郎の不同舎に入る。鹿子木は、前掲の追悼集の中で、小山との出会いについて、以下のように書いている。

一、僕ガ初メテ小山先生ニ見エタノハ明治二十五年ノ十一月頃デアツタ。当時僕ノ兄ガ杉浦重剛先生ノ称好塾ニ在ツテ先生の経営シテ居ラル、日本中学校ノ舎監ヲヤツテ居ツタ。僕ハ兄ヲ訪ネテ称好塾ニ行キ、兄ニ介セラレテ杉浦先生ニ見エタ。

杉浦先生ハ僕ニ何ヲ学バントシテ東京ニ来タカト問ハレタノデ、洋画ヲ学バント希フト言ツタ。杉浦先生ハ「余ノ知人ニ小山正太郎氏アリ。恐ラクハ当代洋画界ノ随一人者ナルベシ。往キテ就学セヨ。」トテ照会状ヲ添ヘラレタ。僕ハ兄ト共ニ小山先生ヲ訪ネタ。之レガ僕ノ不同舎ニ入りタル経路デアル。

（『小山正太郎先生』昭和九年、不同舎旧友会、一七二頁）

やはり鹿子木も、杉浦の仲立ちがきっかけになって小山に師事する事となった。また、鹿子木はフランス留学時代に、浅井忠と同時期を過ごしており、後に浅井と関西美術院を創設する。浅井忠は、陸羯南の親友であり、その繋がりの影響も推測される。彼らの描いた絵は、当初は明らかに戦意高揚を狙った作品や、写真の間に合わない戦闘・海戦の場面、そしておそらく想像で描いたと思われるロシア側の情景などが中心であった。しかし、途中から「万里遠征の情」鹿子木孟郎

(第六号)、「良夜の露音」(第九号)、「愛馬の訣別」(第十二号)といった戦闘間の情景を描いた作品も登場し、そのリリズムは通常の戦争画の域を一步踏み越えたものと見られる。ただし、そうした絵画も第一九号でほぼ掲載が終了し、以降は本格的な写真雑誌となっていく。

(5) 『日本画報』の内容

① 『日本画報』の内容と販売

『日本画報』は、その成立から言っても、当初は戦争報道を主眼においたものとなっている。

新聞『日本』明治三十七年六月十九日の一面巻頭には、「社告」として以下が掲げられた。

去六日を以て第一号を発売せる定期附録日本画報は幸にして江湖の好評を博し数日ならずして第二版増刊の盛況を見るに至れり

(『日本』明治三十七年六月十九日、第五三四八号、第一面)

第一号ということでは宣伝文句としての誇張はあるものの、増刊に至ったとの記述があり、堂々たる写真雑誌の発刊が耳目を集めたのは間違いないようだ。別売りで十銭で販売していたのだが、これが採算的に見合ったのかどうか、経営の厳しかった日本新聞社としては臨時収入となったのが。

其の第二号は来二十日(第三月曜日)を以て発行すべく掲載の写真版は前号に比して一層の精撰を加へたり其の目録を挙ぐれば左

の如し

として二号の目次を掲げている。

実際に完成した第二号は、この広告通りに作成されているが、絵画部分もいくつかあり写真と絵画の組み合わせの苦心が偲ばれる。

三号以下更に光彩を發揮すべきは言ふ迄もなし、当日の新聞は平生刊行の外、数万部を増刷するを以て広告依頼者に取りては其便益頗る大なるべし

但し月極購読者以外の人にして当日の新聞を求めらるゝ人は一部に代価十銭を申受くべし

(同前)

正確な統計は残っていないが、当時の新聞『日本』の発行部数は、おおよそ一万強と推定される。増刷数万部はやや大袈裟かもしれないが、その好評は類推できる。

「明四日発行の日本画報三号の目次左の如し」と、明治三十七年七月三日(第五三六二号)の新聞『日本』の一面に予告広告がでていますが、その最後に、「第一号二号尚ほ多少の残部あり希望者は速に申込あれ」と、バックナンバーサービスにも余念がない。

また明治三十七年八月十四日には

社告

旅順新地図

明十五日、日本画報の外旅順付近の詳細なる地図を附録として発行す

(『日本』明治三十七年八月十四日、第五四〇四号、第一面)とある。

それまで日本新聞社は、明治三十四年から三年をかけて、日本各県の地図を附録として発行しており、地図の附録は既に実績がある。八月十九日には、旅順要塞への第一回目の総攻撃が迫っており日本の耳目が旅順に集まっていた。本紙の報道を見るためにも詳細な地図は役に立ったことであろうし、新聞の売上にも貢献したと思われる。

明治三十七年九月五日には次のようにある。

本日の附録

本日は本紙の外附録として日本画報第七号を添付したり万一配達漏れとなりたる時は直接本社に通報ありたし但し売捌店より御購入の方は売捌店名をも併せ報せられんことを望む

(『日本』明治三十七年九月五日、第五四二六号、第一面)

当時の新聞販売状況が類推される内容である。

十一月三日の天長節に向けては

天長節附録

我社は来月三日天長節を祝するの微意を以て来月第一月曜発刊の日本画報を繰上げ其頁数を増加し十二頁とし三日本紙の附録として発刊すべし紙中収むるもの左の如し

(『日本』明治三十七年十月十七日、第五四六八号、第一面)

とされている。

第十一号では、明治天皇家の人々の肖像から始まり、同盟国の英

国、友好国の米國、そして清國、韓国の王室、そして最後には現状の交戦國であるロシア皇帝、皇后その家族の写真も収録されている。総力戦が叫ばれたその後の戦争とのテンポの違いを感じる。この第十一号は明治三十七年十一月六日の紙面によれば、

天長節新聞増刷

天長節奉祝の微意を以て発行したる当新聞及附録日本画報第十一号(帝王之卷)は幸に江湖の喝采を博し当日は特に数万部を増刷したるに拘はらず、忽ちにして売切れとなり

(『日本』明治三十七年十一月六日、第五四八八号、第一面)

とあり、数万部というのがどの程度の実数であったかは不明だが、販売に貢献したことは確かなようである。明治天皇の写真が「御真影」として各学校に飾られていた時代のことを思い合わせると、この第十一号のインパクトが想像される。

くわえて、

本月一日の新聞より新たに御注文の月極購読者に対しては無料進呈すべし (同前)

と、販売拡張の手段としても使われたものと想像される。

新聞『日本』が、『日本画報』に対してどのような紙面イメージをもっていたかについては、明治三十七年十一月二十九日の「社告」で、

社告

日本新聞紙上毎号挿入する写真版は意匠斬新、材料珍奇、印刷鮮

明なるの点に於て殆んど日本第一と称せられ、欧米諸国の新聞紙は競ふて材料を本社新聞に求むるに至れり

(『日本』昭和三十七年十一月二十九日、第五五二一号、第一面)

世界の注目した日露戦争の写真記事材料を日本新聞社に求めてきている、という。

日本新聞の定期附録として毎月二回(第一第三月曜)月極購読諸君に進呈する日本画報は其精巧鮮麗、優に英国の『グラフィック』、『イラストレード・ロンドン・ニュース』若くは仏の『モンド・イラストリー』等と対し得べく、全国幾百の専門画報を凌駕する所あるは一見して之を判知するに足らん (同前)

前年から明治三十七年年初にかけて、欧米を視察してきた羯南の最新の知見がここに生きてきたものと思われる。おそらくここに掲げる『グラフィック』、『イラストレード・ロンドン・ニュース』、『モンド・イラストリー』の現物を日本へ持って帰ってきたのであろう。いずれも挿絵入り新聞、写真誌の代表的なもので、羯南たちの目指した方向性がうかがえる。

同時期に日露戦争を描いた代表的な雑誌形式の画報としては、国木田独歩の編集していた近時画報社の『近時画報』(日露戦争期間中は『戦時画報』)、富山房の『軍国画報』、そして博文館の『日露戦争写真画報』があったが、これらは基本的には読み物の延長にあり、雑誌

版の大きさであった。例えば写真画報とつたっている『日露戦争写真画報』であつても、その内容構成は、光澤写真版、軍国画譜、時局写真版と、ここまでが図版で、ページ数でいえばほぼ半分を占める。図版の約三分の一程度が絵画になっており、号数をかなり出していたこともあつて、写真は雑多なものを詰め込んでいる観が否めない。その後には、「征露戦史」、「世界時評」、小説と講談などの読み物が続いていく。ページ数は少ないが、写真を大きな紙面で、前面に押し出されてきているという特色のある『日本画報』に対し、迫力の点で若干の見劣りがする。余談になるが、この雑誌の編集責任者の中には、陸羯南の盟友、国分青崖が名を連ねている。

② 読者層

『日本画報』の読者層としては、家庭に読まれ得る新聞なきは目下新聞社界の恨事なり我が社は久しく之を憂ひたりしが今回聊か微力を此方面に尽し家庭の好読物に適する 各種の記事を採録すべきは勿論、婦女児童の必読すべき部分には総振仮名を附し従来の面目を一新すると共に聊か此欠陥を補んと欲す (同前)

とされ、ここでいう「家庭の好読物」は、新聞『日本』が正岡子規に編集を任せた「小日本」で目指した部分であり、また総振仮名を振るということは、かつて羯南が、振仮名がなければ読めない読者には

読んでもらう必要がないとしていた編集方針からすれば、大きな転換といえよう。写真を大きく採用することで読者層も変化し、それが編集方針をも変化させるきっかけになったかもしれない。

明治三十七年十二月十八日の紙面では次のような「社告」がある。

社告

次回の日本画報

明十九日発行の日本画報には禁苑の菊花及び戦地の写真を掲載す。

禁苑の菊花は今年特に戦死者の遺族に拝観の栄を賜りたる者、我が社が特に其筋の許可を請ふて之を掲載するは出征の諸士と共に此栄を頒たんと欲するの微志に出づ。

(『日本』明治三十七年十二月十八日、第五三〇号、第一面)

禁苑の場所であった皇居の苑が、日露戦争の遺族に限り開放されたことがわかる。その菊の花の写真を掲載することは、今で言えば特報であったのであろう。

菊は是れ帝室の御紋章、花は是れ禁苑特種のもの、忠勇なる我が千里外征の将士、此花に對する時、知らず如何の感を為す。花や霜に傲る、諸君雪を凌ぐ、菊花や清節、諸君は忠節、花の清節と人の忠節と、併せ得て国の精華たり。天花の余香を拝し、延齡の祥瑞に寄せ、遙に外征将士の武運長久を祈る是れ亦た吾人の微衷なり。

(同前)

この花は、戦時の慰めでもあり、また『日本画報』としては、初め

ての戦争題材以外の素材の採用であった。

(6) 『日本画報』の終焉

① 写真・記事の多様化

明治三十八年一月一日の元旦には、『日本画報』の第十五号が発行されている。

「御題新年山」として、富士山八景、ヒマラヤ、アルプス、ロッキー、そして台湾の新高山、と名山の特集となっている。

また、同日付けの本紙に、「世界風俗」として世界各地の風俗の紹介写真が載せられていることにも興味を引かれる(『日本』明治三十八年一月一日、第五五四号)。

本紙の予告には、

左の世界風俗を鮮明なる写真版に附して読者をして座ながら観光の途に上らしむ目次左の如し

世界風俗

世界第一の名女優仏国サラベルナ

布哇土人舞踏

亜弗利加ナタールの人力車

英国倫敦の大競馬

支那香港の学校

南洋フィジー土人の擬戦

(中略)

印度タンカリーの僧侶神鷲に飼を興ふ

(中略)

オースタラリヤの漁

(中略)

ジャマイカの労働者

(以下略)

(『日本』明治三十七年十二月十九日、第五五三二号、第一面)

実際に出来上がった紙面を見ると、予告されていた内容の写真が見開き一杯に散りばめられた紙面が、五面にわたって連続する。写真は、絵ハガキの域を出るものではないが、『日本画報』の好評が本紙の紙面構成も変えていった。「世界風俗」は好評であったのか、その後も何回か本紙に登場する。

さらに、明治三十八年一月二十八日の一面には次の社告がある。

社告

紀元節の日本画報

来月第二月曜発行の期日を紀元節に繰上げ当日の画報紙上に於て数枝の梅花を我が出征将士諸君に贈らんとす疎影暗香聊か以て冬営陣中の情を慰するを得ば幸いなり

(『日本』明治三十八年一月二十八日、第五五七二号、第一面)

実はこの第十七号は、「梅花八景」として、梅花を持つ日本の少女、美人の写真集になっている。

日本で最初の美人写真集ではないかとも思うのだが、遼東半島から

満州に展開していた将兵の手元にも送られていたのであろうか。家族が慰問で送ることができたのであろうか。

富山で発見された北日本新聞博物館所蔵の『日本画報』一揃いは、朝鮮半島の平壤にあった日本領事館に勤務していた人物の遺品の中にあつたものである。内山邸の蔵の中から『日本画報』が発見されたという新聞記事がきっかけとなり、支那靴の中から見つけ出されたとの経緯であつた。平壤の日本領事館にも届いていたこの『日本画報』は、持ち主が朝鮮半島で客死した後に、遺族の手で日本に持ち帰られ、富山で百年近く眠っていた。

明治三十八年三月上旬の奉天での会戦に勝利した後、同年三月二十七日の『日本画報』については、

社告

次回の日本画報

明二十七日発行の日本画報第二十号には敵国之巻と題し露国の皇室文武官文豪等数十名の写真を蒐む

(『日本』明治三十八年三月二十六日、第五六二八号、第一面)

とあり、第二十号には予告通り、ロシアのニコライ二世皇帝、アレクサンドラ皇后からはじまり、後に革命で殉難した皇女たち、ポーツマスで小村寿太郎と論争をくり上げたウィットをはじめとした閣僚の面々、そして最後のページには「文豪」トルストイとゴッリキーまで紹介されている。こうした写真は、日本に展開していた通信社から入手したのであろうか。陸軍の大陸での勝利が敵国を紹介する余裕を生

んだのか、ただ、この時点でバルチック艦隊は着々と日本を目指して
廻航を続けていた。

続く四月十日は、春らしく

社告

桜花之巻

右は来る十日発行の日本画報第二十一号に収む満紙皆花、坐して
天下の名勝に接するを得うべし

(『日本』明治三十八年四月三日、第五六三六号、第一面)
であった。

紹介されているのは、上野・向島・飛鳥山・芝増上寺・小金井・隅
田川の花見船・江戸川など、いずれも現代とあまり変わらない場所
で、着物姿の男女が宴に興じている。

中に「桜花一枝 友禪染の桜(三越呉服店)」という友禪染の図案
に使われた桜のページがあり、そこに三越呉服店の名前があるのは、
今でいうタイアップコマースシャルのはしりなのであろうか。着物の図
案の真ん中に、艶然と日本髪的美女が登場しているのも春めかしい。
最終ページには、花見風俗として日本髪の美人が右手で日本傘、左手
で花一枝、という一ページ全面のグラビアになっており、第十七号の
梅花がつけたのか、桜花に美女という構図が美しい。

そして第二十二号は「奉天の巻」である。

社告

今回の日本画報

奉天の巻

と題して特派員大我生が送り来れる最新最近の奉天会戦に関する
写真数十種を蒐む

(新聞『日本』明治三十八年四月十六日、第五六四九号、第一
面)

ここに登場する「特派員大我生」というのは、新聞『日本』の敏腕
記者の一人であった桜田文吾のことである。桜田は、明治初期のルポ
ルタージユの古典である、新聞『日本』に連載されていた、「貧天地
飢餓窟 探検記」の執筆者である(明治二十三年八月二十九日、第四
七四号から新聞『日本』に連載)。彼は、文久三(一八六三)年仙台
藩士の家に生まれた。紀田順一郎がその著『東京の下層社会―明治か
ら終戦まで』(新潮社、平成二年)で紹介しているところによれば

幼くして父を失い、さらに二人の兄がそれぞれ戊辰戦争と五稜郭
の戦いに敗れたのち病没、一人の姉も誘拐されたため、母親は悲
嘆のあまり世を去った。

(紀田順一郎『東京の下層社会―明治から終戦まで』、三三三頁)
とあり、このあたりの悲惨な生い立ちは、同じく新聞『日本』に連
載されて評判を呼んだ「血写経」の執筆者で、羯南の親友でもあった
愚庵天田五郎の生い立ちに似ている。奥羽越列藩同盟に加わった、い
わゆる「賊軍」の藩の人々は多かれ少なかれ同じような境遇を味わっ
たのだと思う。

彼みずからは苦学の後、東京法学院(のちの中央大学)卒業、緑

あつて陸羯南の経営する日本新聞社に入社することができたのである。
(同前)

桜田は、日清戦争でも従軍記者として活躍したのだが、十年後の日露戦争でも第一線に赴いていた。

内容的には、奉天の会戦にからむ戦場写真が中心なのだが、最後に「満洲に於ける上流の婦人」からはじまり、「女子風俗」、「下流の婦人」までのスナップがあるのは御愛嬌といえよう。

そして、突然だが第二十三、二十四号は連続して「相撲の巻」となつて、題材が新たな分野に入ってくる。

表紙には、当時の横綱常陸山、梅ヶ谷が化粧回しで掲載されているが、その堂々たる押し出しに、外国人のみならず、同じ日本人でもあまり相撲を目にすることのできない地方の読者には、大きな魅力だったと推測される。

新聞『日本』はこれ以前の紙面でも、一面にイラスト入りの相撲の特集を組んだりしており、スポーツ報道のはしりとして見た時にも興味深いものがある。

また、この第二十三号には、三越呉服店の売り場紹介の紙面が二ページにわたつて掲載されている。これもタイアップの延長であつたのか。

最終ページには、北海道炭鉱鉄道の港湾施設、鉄道などのインフラが紹介されている。この後『日本画報』には、この種の企業紹介、イ

ンフラ紹介がいくつか出てくる。

芝浦製作所

石川島造船所

古河鉱業

品川毛織

鐘淵紡績

東京製絨

鈴木鉄鉦

桜組

日本精製糖

北海道炭鉱鉄道

東京瓦斯

これらは一連のシリーズのようでもあり、各巻のテーマに拘わらず、挟み込まれていることが多い。

② 『日本』・『日本画報』と海外宣伝

当時の日本は、日露戦争の戦費調達のために、欧米の市場で国債を販売していた。この『日本画報』は、創刊号から全てのページに英語の訳文がついていることから、海外に出すことを意識していたのではないだろうか。いつまでも、チョンマゲ、富士山、芸者の日本のイメージを、近代工業国家に塗り替えるための一助としたのかもしれない。

有山輝雄の『陸羯南』（吉川弘文館、平成一九年）には、明治三十四年から三十五年にかけて羯南が新聞経営のための金策に走りまわる姿が、種々の資料を使って克明に描かれている。その中で、当時の外務大臣であった小村寿太郎から資金援助を受けるくだりがある。小村は、新聞『日本』の発起人の一人である杉浦重剛の学友であったことから、様々な局面で羯南と関わりをもっていたようだ。

小村自身が、対外的な日本の国家イメージを変えていくために、羯南にこの画報の利用を相談したことは推測される。

明治期の外務省は、新聞を対外宣伝の手段として利用していた。例えば、外交史料館に残されている「外務省記録」新聞雑誌操縦関係雑纂のなかには、明治三十九年の在奉天総領事であった萩原守一の電報が残っている。

機密第六七号

遼東新報へ補助金下附ノ件

大連ノ遼東新報ハ其支局ヲ当地ニ設置シ近ク新聞事業ヲ開始スル事ニ略ホ決シ居候処開業当座ニ於テハ相当ノ補助金下附致サズテハ営業困難ナル趣ニテ先般山座局長來奉ノ際同社主末永純一郎ヨリ同局長ニ内願スル処アリ同局長ヨリ本官ニ協議有之候ニ付補助金月額一百円以内ナレバ相当ノ条件ヲ以テ給与方稟申可致旨相答ヘ置候該支局モ近ク事業開始可致ト被存候ニ付右補助金御下附方一応御詮議ノ上御回訓相成度此段稟申得貴意候敬具

明治三十九年七月廿四日

外務次官 珍田捨己殿

在奉天総領事 萩原守一

(JACAR (アジア歴史資料センター) RefB03040609600 (第183画像目から)、新聞雑誌操縦関係雑纂／遼東新聞(1・3・1)(外務省外交史料館))

ここに出てくる末永純一郎は、日清戦争当時、鉄廠の号にて新聞『日本』の従軍記者として健筆をふるい、古島一雄が九州の新聞社に出ていた間、代わって編集長を務めたりしたキャリアもあり、新聞『日本』出身の記者としては非常に重要な人物の一人である。ここにあるように、彼は後に大連に渡り、『遼東新報』をおこした。

この奉天総領事が申請を書いている相手の珍田捨己は、羯南の友人であり、当時の津軽出身の外務官僚である。

富山に残された『日本画報』が、朝鮮の領事館で勤務されていた方の遺品から見つかったということも、外務省と新聞『日本』の繋がりの証左になるかは今後の研究を待ちたい。外務省はこの期間の新聞『日本』を、日本という国家の宣伝ツールの一つとして在外の公館に送付していた可能性は推測される。

③ 『日本画報』の終焉

この第二十三、四号以降、日露戦争の範囲外の題材に積極的に踏み出した『日本画報』は、その後もその路線を続けている。各号の内容は以下の通りである。

第二十五号 流行の巻

- 第二十六号 海戦の巻
 - 第二十七号 工場の巻
 - 第二十八号 樺太の巻
 - 第二十九号 ナイヤカラ瀑布 タフト・ルーズベルト嬢一行
 - 第三十号 外交の巻（ポーツマス会議）
 - 第三十一号 日比谷公園焼き打ち、清国、米国、日本風俗（発行停止、発行遅れ）
 - 第三十二号 運動の巻
 - 第三十三号 天長節奉祝記念号
 - 第三十四号 伊勢行幸、凱旋
 - 第三十五号 新年号 馬年
 - 第三十六号 紀元節号 皇室
 - 第三十七号 英国 コンノート殿下 陸軍記念日 川上一座
 - 第三十八号 六千号 記念 古来風俗の変遷 菊人形
 - 第三十九号 観兵式、宮城前戦利品
 - 第四十号 三殿下 サンフランシスコ地震
 - 第四十一号 清国 名所旧跡
 - 第四十二号 菊人形
- 内容的には、ファッションあり、経済ものあり、スポーツあり、海
外事情ありと、現代の新聞が取り上げている分野がほとんど網羅され
ている。

第四十号が明治三十九年六月二十二日の発行、羯南が新聞『日本』

を譲渡したのが同年六月三十日であったことから、この第四十号までが羯南のもとで製作されたものと言える。

現在確認されているのは第四十二号までであるが、この出版を契機に続号が発見されることを願ってやまない。

『日本画報』を通観してみると、そこにはこれまで、一般的に羯南と新聞『日本』に対して言われてきた反骨のジャーナリズムとは違った側面が見えてくる。そこにあるのは、羯南と新聞『日本』の人々の、新たな新聞紙面改良のための技術的努力であり、それが当時最も先端をいく写真の紙面導入という形をとって発現している。古島一雄が自ら言っているように、当時の最先端技術を開発したのが、「一番保守党の『日本』新聞だったのである。（『古島一雄清談』、毎日新聞社編、昭和二十六年三月、毎日新聞社、六八頁）

また、始め戦争報道の一環として発行されたグラフィ誌であったが、その内容は部数を重ねることに実に多岐にわたって展開していた。先述したように、その内容は、世界風俗、日本のインフラ、主要企業、スポーツ、ファッション、そして美人写真と、硬軟とりまぜた素材を取り上げている。羯南が写真技術の開発を命じ、古島一雄を中心とした編集のメンバーが多種の内容を取り上げた『日本画報』が、昭和に入って一部の勢力によってねじ曲げられた羯南と新聞日本の人々のイメージを変えるものと考えられる。

4. 新聞日本の欠号部分

ゆまに書房の復刻版は、東京大学明治新聞雑誌文庫の所蔵の資料を使っていた。

他に大規模に収蔵されているのは、国会図書館、新聞博物館、早稲田大学図書館などがあげられる。これ以外に、羯南が皇室に都度寄贈したものと云われていたが所在不明であった。

宮内庁書陵部に問い合わせたところ、昭和の終わりの時期に、国会図書館に移管したとの回答。国会図書館のデータベースにはのっていない。

データ上は所在不明であったが、国会図書館の新聞担当に更に問い合わせたところ、一九八八年に、宮内庁から国会図書館へ移管したものが未整理の状態で見られることがわかった。申請を出して実物を確認すると、明治二十三年十月以降が所蔵されており、月ごとに紙の表紙が付けられ、非常に美しい状態で保存されていた。残念なのは、復刻で欠号部分であった二号、三号はなかったが、六〇〇号は確認できた。難読部分は、ほぼカバー出来ている。

興味深いのは、東大の所蔵では見られない、附録 号外が所蔵されていることで、他で所蔵されている資料とともに、完全版としての復刻が待たれる。

二号については、これも偶然から、天田愚庵の御子孫から寄贈を受け、里帰りということで、弘前の郷土文学館に寄贈した。

5. 分県地図

同時並行的に、新聞日本の他の附録、関係資料の検証を行っていたが、新聞資料研究会の羽鳥知之会長のご紹介で、富岡八幡宮で開かれている、早期の骨董市を訪れた際に、神社の一角で店ひらきをしていた露店のダンボールの中に、日本新聞社の附録の県ごとの地図が何枚か売られているのを見つけた。

復刻版の同時期の新聞紙面を見ているとたしかにほぼ毎月、各県ごとの地図が附録として発行されていたことがわかった。以降、全貌をつかむために、一枚ずつ集めていったが、最後の神奈川県がなかなか見つからず難渋した。最終的には、福岡の古本屋で売られているのをネットで発見し購入した。

(1) 附録地図の始まり

明治三十三年十二月十二日、新聞『日本』は、一面のトップに以下の社告を掲げた。

社告

明年元旦初刊附録 清事参考地図 満洲及支那本部精細の図

本紙二頁大彩色刷

成章堂製 亜鉛凸版

右新年奉祝の為め月極読者に進呈す。

元旦初刊の「日本」は数万増刊の筈なれば広告御依頼の向は成るべく速に御申込被下度此段広告候

三十三年十二月

日本新聞社

この年、「清事」すなわち北清事変がおこった年であり、日本の読者の注目も中国大陆に集まっていた。

一方、この時期『日本』は、相当の資金難に陥りつつあり、資金繰りをめぐって、社長の陸羯南は苦闘していた。

翌年にはこの地図の製造もとである日本新聞社のグループ印刷会社成章堂が出版したウェブスターの辞書の版權訴訟の問題も生じ、さらに追い詰められる。

昭和に入ってこの時代を回顧した古島一雄、三宅雪嶺、長谷川如是閑らの対談が残っている。

室伏 どの位売れたものですか、その頃で。

古島 さあ、一番よく売れたのが戦争後—その時二万も売れたかな？

緒方 日清戦争ですか

三宅 さう、そのころは儲かった。そこで調子に乗って—。

古島 それで失敗した。成章堂といふ凸版事業をやつて—。

馬場 凸版をやつた？

古島 ウェブスターの辞書を凸版でやる、それを予約でやつて失敗さ。

三宅 丸善からやり込められて—。

長谷川 僕の所にあの厚いやつが(辞書)ありますよ。

三宅 版權がどうとかといふ—。

長谷川 あれは訴へられたんでせう。

三宅 さう。

長谷川 絶版にするか何かの約束で妥協したんでせう、もう出さなといふことで—。

(「三宅雪嶺博士と「明治・大正・昭和」を語る」『日本評論』)

昭和十年十一月号 出席者 三宅雪嶺・緒方竹虎・古島一雄・長

谷川如是閑・馬場恒吾・杉森孝次郎・室伏高信)

通常の社業の状態でも資金繰りの厳しい同社にあつては、丸善との訴訟の敗訴による賠償金の支払いはより大きな負担となったことは想像にかたくない。

成章堂は日本新聞社のグループ会社で、初期の日本叢書をはじめ、日本新聞社の印刷物のほとんどをてがけている。当初は、日本新聞社の近所で別の社屋を構えていたが、途中から経費節減のためであるうか同じ社屋に入り、一階に印刷所、二階に編集部が入って同居状態になった。

このように経営的には追い詰められつつあった時期の新たな企画である。

古島一雄以下の実務を担う編集スタッフたちは、いかに読者を獲得するか苦心惨憺の末のアイデアであった、と思われる。

(2) 北清事件参考地図

明治三十三年十二月十七日の新聞日本の一面トップには、

一面には社会に対する新聞紙としての責任を果たさんが為め、

一面には愛読者諸君の多年の厚意に酬いんが為め明年後の「日本」は予ての計画に基きて斬新なる意匠を加え、大に面目を刷新して改良の実を挙げんことを期す、就中

○清事参考図

明年元旦の初刊には本紙数拾頁の外別に二頁大二回摺りの精細美麗なる支那及び満州地図を附録とすべし。地図は成章堂特得の亜鉛凸版に由りて印刷したるものにして其鮮明精確なるは巷間稀に見る所なり。

○週報の改良

○各府県地図

来年一月より引き続き本紙の附録として各府県道台湾の精細なる地図を各別に刊行しなるべく速やかに全国地図の完成を期すべし。是また成章堂特得の亜鉛凸版を応用するものにして、其鮮明精確なるは同堂の自負するところなり。故に本紙の購読者は順次各府県の精確なる地図を座右に備ふるを得べし。

等は其の重なるもの、特に元旦の初刊は数万部を増刷し広く朝野各府県の有力者及び商工業者に配布すべし。

但し元旦の新聞に限り附録共一部金拾銭

○初刊広告締切

明治三十三年十二月

本月廿五日限り
日本新聞社

時あたかも西暦では一九〇一年、二十世紀の幕開けの年である。

明治三十四年一月一日に附録として作成されたこの「北清事件参考

地図」、即ち中国全土の地図が国会図書館に残されている。

この地図は「帝国図書館」の印があることから、同時代に直接寄贈されたものである。右下には「製本・明治三十四年六月七日」との印もある。

その地図面の右下には、

清国面積及人口表（千八百九十八年調）

東洋に於ける列国艦隊（三十三年末調）

という統計データが載っている。

省の分け方、自治区の分け方は、満州がひとくくりになっている以外は、ほぼ現在の中華人民共和国の行政区分と一致している。総人口は、三九九、九三三、〇二九人であり、現在の四分の一以下であった。

興味深いのは、もう一つの「東洋に於ける列国艦隊（三十三年末調）」という統計である。

日本	五五隻	二〇〇、二〇〇噸
英国	四九隻	一四三、一七三噸
露国	二七隻	九一、八七三噸
独国	一七隻	八七、二一八噸
仏国	二二隻	七四、四五七噸
米国	一七隻	五七、六七九噸
伊国	六隻	二五、二四二噸
奥国	四隻	一四、〇〇〇噸

和国 三隻 一〇、〇〇〇噸

と並ぶ。

この国々は、北清事変で、北京に籠城した八ヶ国であり、この各国の東洋における海上兵力の比較となっている。地元の日本はともかく、英国はシンガポール、香港の海上兵力を合計、また露国は、ウラジオストック、仁川、旅順を合計した兵力と思料される。

余談であるが、この北京籠城で結果的に各国をまとめて指揮したが、新聞日本の初期の重要な執筆者の一人であった東海散士こと、柴四朗の弟、柴五郎少佐であった。この柴少佐の活躍がモリソンという英国人記者の報道によって英国に伝えられ、日本の評価を揚げた、という論もある。

いずれにせよこの時期、日清戦争、三国干渉を経て、この北清事変で再び国民の注目が大陸に注がれていた時期に付録として中国地図を発行したのである。

この統計は、海上兵力の観点から、日本と英国の戦力が連携すれば、東洋における覇権をにぎることができるといふことを暗示しているかに見える。日本は、ロシアの南下政策を牽制し中国大陸における自国の利権を確保することを目指す英国と明治三十五年日英同盟を締結する道を選ぶ。

(3) 附録の府県地図の始まり

この時期、現在のように簡単に地図が手に入る状況ではない時代

に、附録に地図をつける、ということ自体が大きな魅力であり、かつまた台湾を含む全国の道府県を網羅しようとする企図自体も一つのアピールとなったことであろうことが窺われる。

明治以降の地図の歴史は、日本測量協会の「測量地図百年史」(昭和四十五年三月)によれば、民政部地理司、工部省測量司に始まり、内務省を経て、陸軍陸地測量部へ収斂されていく、いわゆる官製地図の歴史が中心であった。

官製地図は、行政的、軍事的な側面から、全国の地図の早期の完成を目指して展開していった。

明治元年太政官は、各県に管轄地域の地図の作成を求めた、という記録はあるが、その地図自体は現存しない。

また一方、地方の行政府も、藩制から県制に移行していくなかで、その新たな「県」という行政単位の定着のためにも、各地で独自の県地図が作成されていった。県別地図に「管内」と付されているのは、各県の管轄内、ということを現わしている。しかしこれらの動きはあくまでも、各県各地の個別の動きであった。(以上は、「官版府県図」師橋辰夫 『月刊古地図研究』 第四号 昭和四十五年六月、および「明治初期のアトラス(分国図帖)について」佐藤達一朗 同 第百号 昭和五十三年による。)

また他の新聞の一部には、日清戦争の際の朝鮮半島近辺地図、日清戦争以降の台湾割譲時の台湾地図などの附録製作の事例は認められるが(『新聞付録万華鏡』おまけ)にみる明治・大正・昭和) 二〇

○三年三月 日本新聞博物館編、有山輝雄監修)、全国すべてを網羅的に附録化する、という試みはなかった。

前記のアトラス、即ち分国図帖の延長線に、『大日本管轄分地図』という地図が明治二十七年から発行されたがこちらの地図は江戸期の絵図と地図の中間点にある位置づけであった。

こうした地図製作の歴史の流れの中で、一新聞社が、全国の各県別の地図を発行したことは、かなり大胆な事業であり、画期的なことであつたことがわかる。

明治三十四年一月十九日、『日本』の二面の片隅に

社告

○東京府管内地図(来二十五日本紙附録)

予ての公告に基づき本社は全国府県地図の第一着手として先づ東京府管内地図を刊行し、来る二十五日の本紙附録として月極の購読者諸君に進呈すべし。

是れ成章堂特得の亜鉛凸版を応用したるものにして其の精巧なるは巷間稀に見るところなり。

但し当日の新聞に限り一部金五銭。

○長野県管内地図(来二月下旬刊行の予定)

という社告を掲げた。

この地図は基本的には「月極」購読者への附録であつたことがわかる。

ある意味で、現代の新聞販売店が繰り広げている、販売拡張のためのグッズのような働きをしていたのであろう。

発行の第一号は首府である東京であつた。以降関東から順番に展開したかというと実際は、以下の発行順であつた。

第一回	東京府	明治三十四年一月二十五日
第二回	長野県	明治三十四年二月二十一日
第三回	神奈川県	明治三十四年三月十三日
第四回	埼玉県	明治三十四年四月三日
第五回	山形県	明治三十四年四月二十五日
第六回	新潟県	明治三十四年五月十日
第七回	富山県	明治三十四年五月二十五日
第八回	石川県	明治三十四年六月十三日
第九回	秋田県	明治三十四年六月二十七日
第十回	台湾総督府	明治三十四年七月十二日
第十一回	福井県	明治三十四年八月一日
第十二回	青森県	明治三十四年八月十五日
第十三回	福島県	明治三十四年九月四日
第十四回	岩手県	明治三十四年九月十八日
第十五回	宮城県	明治三十四年十月三日
第十六回	栃木県	明治三十四年十月十七日
第十七回	群馬県	明治三十四年十一月三日
第十八回	茨城県	明治三十四年十一月二十二日

第十九回	千葉県	明治三十四年十二月三日
第二十回	静岡県	明治三十四年十二月二十五日
第二十一回	愛知県	明治三十五年一月二十三日
第二十二回	山梨県	明治三十五年二月二十日
第二十三回	熊本県	明治三十五年三月十二日
第二十四回	長崎県	明治三十五年三月二十六日
第二十五回	佐賀県	明治三十五年四月十六日
第二十六回	福岡県	明治三十五年四月二十六日
第二十七回	鹿児島県	明治三十五年五月二十六日
第二十八回	宮崎県	明治三十五年六月十一日
第二十九回	大分県	明治三十五年七月八日
第三十回	沖縄県	明治三十五年九月十日
第三十一回	滋賀県	明治三十五年九月二十八日
第三十二回	岐阜県	明治三十五年十月十六日
第三十三回	三重県	明治三十五年十一月二十日
第三十四回	島根県	明治三十五年十二月二十日
第三十五回	鳥取県	明治三十六年一月二十一日
第三十六回	高知県	明治三十六年二月二十五日
第三十七回	大阪府	明治三十六年三月二十五日
第三十八回	北海道	明治三十六年四月十五日
第三十九回	山口県	明治三十六年五月三十日
第四十回	岡山県	明治三十六年七月十五日

第四十一回	京都府	明治三十六年八月七日
第四十二回	愛媛県	明治三十六年八月二十九日
第四十三回	奈良県	明治三十六年九月二十五日
第四十四回	兵庫県	明治三十六年十月二十二日
第四十五回	和歌山県	明治三十六年十一月十八日
第四十六回	徳島県	明治三十六年十一月二十九日
第四十七回	広島県	明治三十六年十二月二十日
第四十八回	香川県	明治三十六年十二月二十七日

この順番がどのように決まったか想像の範囲を出ないが、地図の仕上がり、裏面に掲載されていた各種統計資料の収集状況によつたものではなかつたかと思料される。

(4) 地図裏面の統計

第一回の東京から、地図の裏面には、各種統計が掲載されていた。新聞日本の明治三十四年一月二十六日の社告には次のようである。

社告

○全国府県地図

座して天下の形勢を知らんとするに先づ精確なる地図を査するに若くはなし、本社発に見る所あり、専ら国民の実益に資するの目的に副そはしむる為め今月より引き続き本紙の附録として全国各府県道庁台湾等の精細なる地図を各別に刊行し、成るべく速やかに全国地図の完成を期と欲し、其の第一着手として一月二十五日先づ

○東京府管内地図

を刊行して之を配布したり、尚ほ次回は

○長野県管内地図

にして、是れまた遅くも二月下旬には刊行すべき予定なるが、これ等はすべて成章堂特得の垂鉛凸版を応用するものにして其鮮明精確なるは既に天下に噴々たる所なり、故に本紙の購読者は順次各府県の精確なる地図を座右に備ふるを得べし。

尚ほ右地図の裏面には其府県における重要統計例えば、管内各郡面積戸数及人口、同民有有租地反別地価、納税人員及金額、議員選挙資格、各学校数、職員及生徒、重要農産物統計、重要工業品統計、神社仏閣、名勝旧跡等各種の正確なる報告を記入する筈なるをもつて各府県の地形を知ると同時に国勢の一斑をも認知するを得べきなり。

明治三十四年一月二十六日

日本新聞社

この裏面の統計項目については、別表（地図裏面統計項目比較表）の如く各府県で微妙な違いがある。これは統計の出典及び各府県の特性による。

これらの統計データの正確な出典については、今後の詳細な研究を待ちたいが、大きな項目については、当時すでに全国統計開始以降二十年近く経過し、相当程度のレベルにあった「帝国統計年鑑」からの引用と推定される。

また各県の特異性をあらかず項目については、県別の勸業年報が出典として想定される。

国会図書館一般調査部が編集した『明治以降都道府県統計書総合目録』（昭和三十三年）には、左記の「道府県勸業年報類一覧」が表化されて添付されている。

これによれば、各県の勸業年報の初期の発行時期が確認できる。最も遅い沖縄の明治四十三年を除けば、奈良、栃木、埼玉が明治三十二年で並んでいる。

地図の発行開始が明治三十四年であることを考えあわせると存外、各県の統計が出揃い始めたことが、発行のきつかけの一つとなったものと推量される。

(5) 新聞本紙の府県特集

本紙にはこの附録が発行された同日にその府県の特集が組まれることが多かった。たとえば明治三十四年二月二十一日の紙面には、

●長野県治一班

信州の地重巒四境を囲み大河南北に分流し形勢雄偉にして土地高隆誠に是れ本邦の一大山国たり」（『日本』明治三十四年二月二十一日 第三面）

と始まり、以下の大項目について、議論を披歴している。

○政況一班（憲政派の勢力扶植）

○教育一班（中学校の増設）

- 勸業一班（実業学校の必要）
- 治水一班（治水方針の未定）
- 交通一班（篠ノ井線の開通）
- 松本の現在将来

今では、全国紙が日本、世界に支局を展開し、通信社も世界中のニュースを配信しているが、この時代で地方支局も充実していない新聞社が、各府県が現在目の前におかれている事実に対して議論を展開する、というのはいかなりの準備が必要であったことと史料される。その準備の過程が如何であったのかは今では知るよしもないが、逆にいえばこの準備の過程が、日本新聞社にとって同時代の日本各地の現実をより深く認識するプロセスになった、と言える。

この府県特集とも言える本紙での各県の特集は、必ずしも毎回、というわけではなかったが、

- 明治三十四年五月十日 新潟県政一班
 - 同 五月二十五日 富山県政一班
 - 同 六月十三日 石川県政一班
 - 同 六月二十七日 秋田県政一班
- とこの期間は連続して掲載された。
- 明治三十四年六月二十七日の紙面では、

- 秋田県政一班
- 総説
- 学事

- 尚武
- 衛生
- 政党
- 交通
- 生産
- 秋田市
- 付記

と、徐々にその記述のスタイル、項目が確立されてきている。

(6) 台湾府地図

そして明治三十四年七月十二日が台湾府の地図の発行となる。

- 台湾府政一班
- 概記

台湾が帝国の領有に帰してより、茲に八年の星霜を経、其の間当局者の施設に対して毀誉褒貶の批評区々ならざるが、世人の同島に就いて画ける想像も其の真を失すること少なしとせず。

台湾は、日清戦争の勝利の結果、日本が初めて得た海外の領土で、日本にとって植民地経営の実験場でもあった。

- 台湾の三大専売
- 阿片専売
- 樟腦専売
- 食塩専売

専売の筆頭に阿片が来ている部分は、アヘン戦争以降の阿片の風習が台湾にまで及んでおり、それを行政がコントロールしようとした姿勢が伺われる。

○其他の重要物産

○台湾の製糖業

○台湾の学事

○土匪並に生蕃人

と並ぶが、政党事情の替わりに、現地の先住民族の状況を紹介しているのが、興味を惹かれる。

最後に、台湾新営事業が語られるが、「縦貫鉄道、土地調査、庁舎新営」、いずれも日本の植民地経営の置き土産となった。

『日本』と、台湾は因縁浅からぬものがある。

後に羯南の次女と結婚することになり稀代の中国文学者として大成した鈴木虎雄は、東京帝大卒業後、日本新聞社で勤務ののち、明治三十六年四月台湾日日新報社で二年ほど漢文部の主任として勤務する。

同じ年の八月、八戸出身の『日本』の記者、浅水南八も同じ新聞社で働きはじめた。

羯南の死後、長女の婿東海勇蔵の兄で、『日本』の最後の時期を新聞経営に苦闘した赤石定蔵も渡台し、台湾日日新報社に入社、後に社長となる。

同じく羯南の死後、日本新聞社を退社した弘前出身の花田節も、朝鮮にわたり、京城日報、大韓日報を経て、台湾日日新報社に入社す

る。

ある時期の台湾日日新報社は、国内にあつては、池辺三山、鳥居素川、長谷川如是閑、安藤正純、丸山幹治を羯南のもとから受け入れて興隆した朝日新聞と同様、『日本』のOBによって支えられていたといつても過言ではなからう。

羯南死して、その精神と育成した人材は、日本国内においては、朝日、毎日、読売へと展開し、アジアにあつても末永純一郎の大連における遼東日報、国友重章の朝鮮での漢城日報も考えると、台湾、中国大陸、朝鮮へと広がっていった。

その思想的伝播は、京都大学の山室信一の主張する、アジアにおける思想的連鎖の枠組みで近代日本史を捉える、パラダイムの対象としての事例の一つともいえる。

(7) 朝鮮全図

この年、順調に各府県地図の発行がすすみ、十二月二十六日に以下のような社告が一面のトップに掲載された。

来春初刊の本紙

新撰 朝鮮全図 附京城付近図(五万分一) 亜鉛凸版色刷 紙

幅 菊版半裁

浦塩斯徳、嘗口、芝、長崎をも包含し満州東南部も亦此の中に在

り

西比利亞及東清鉄道漸く成りて鶏林半島は恰も兩線路の中間に圍

堯せらる。

時まさに極東を目指すロシアの鉄道路線の完成期にあたっていた。

シベリア鉄道は、一八八〇年アレクサンドル三世の時代に計画が始まり、一八九一年に着工、最大の難所であったバイカル湖の部分も含めておおよその完成をみたのが一九〇一年、即ちこの明治三十四年であった。

また三国干渉の見返りとしてその敷設権を取得した東清鉄道は、シベリア鉄道の入り口である満州里からハルピン經由綏芬河へと続く鉄道であり、同年満州里とシベリア鉄道を結ぶザバイカル鉄道が開通したのであった。この鉄道にはハルピンから長春、奉天を経て旅順につながる支線が建設されており、ロシアの満州地域支配のインフラが確立し始めていた。

たしかに地図を見ると、朝鮮半島はこの二つの鉄道によってあたかも首根っこを押さえつけられているかのようにも読める。

一方には浦塩の軍港あり他方には旅順大連の設備殆ど整い満韓の形勢茲に一大変遷を来たさんとするの徴あるに際し我政府及企業家の心力を注ぎたる京仁鉄道既になりて京釜の線路亦將に工事に着手せんとす。(明治三十四年十一月二十六日社告)

京仁鉄道は朝鮮半島最初の鉄道である。

日清戦争後、清国の影響を脱しつつあった朝鮮王朝は明治二十九

年、京仁鉄道敷設権をアメリカ人のモールズに売却した。当時朝鮮駐在公使であった小村寿太郎は、朝鮮政府に対し、アメリカ人モールズに京仁鉄道敷設権を与えることは日朝暫定合同條款違反と抗議をおこなった。

一方、モールズは、その鉄道建設資金をアメリカで行ったがうまくいかず、結果、日本に出資をもとめるため、京釜鉄道発起委員長であった渋沢栄一に京仁鉄道敷設権の譲渡を申し出た。以降紆余曲折があったが、最終的には日本側で買収したのが明治三十二年であり、完成したのが、明治三十三年、つまりこの記事の前年であった。

(8) 木崎盛政と政教図閣

朝鮮地図の社告は続く。

鷄林半島の事豈に惣諸に附すべけんや、

我社爰に見る所あり、来春初刊の本紙には政教図閣主人が数ヶ月の苦心編製に係はる朝鮮全図の精細図を成章堂特得の技倆に由りて印刻せしめ、当日の付録として年来の読者に進呈すべし。

ここに地図の製作者の名前として「政教図閣主人」という名前が出てくる。

地図の左欄外にも

東京飯田町

政教図閣

東京中橋和泉町 藤澤藤房彫刻

東京神田雉子町 成章堂亜鉛凸版印刷

これまで附録の地図の多くは「無銘」の地図が多かった。

ただ富山、石川、福井、福島、岩手の各県の地図には、この朝鮮全図と同じ、政教図閣の名前が入っていた。

政教図閣とは、民間地図作家の大家・木崎盛政が明治二十九年に設立した地図製作工房である。

日本の地理学の先駆者の一人、京都大学名誉教授の小川琢治は次のように書いている。

日本地図帳編纂の趣旨

私は多年地理学及び地質学の研究に従事するにあたって適当な日本地図の無いために不便を感じ、終に自から繙読に便利なものを編纂する考を起して、地図製作に於いて最も手腕あり且つ精良なる製作に熱心なる木崎盛政君に此の考を語つたのは十年の昔であつた。

（『日本地図帖』 小川琢治 大正十三年十二月 成象堂）

木崎は、同時代の秋田兼吉と並んで民間地図を支えた二大地図作家と目されている。

先述したように明治以降の「官製地図」の歴史とは別に「民間地図」の歴史も脈々と流れていた。

木崎盛政については、自らも地図の実作者である辻野民雄氏（地図之研究室）が多くの論文を書かれているが、以下、日本国際地図学会平成十四年度定期大会の発表「民間地図近代化百周年」の講演資料の中から関連部分を紹介させていただく。

木崎盛政（一八六七—一九四五）

慶応三年山形城下生まれ。

小学教員、校長を歴任し陸地測量部修技所第一回生。

卒業製作に抜群の製図を仕上げ製図科に任官。

のちに同所製図学教官に着任し、ドイツ陸測に官費留学。

明治二十年代後半の当地では再編集図（応用地図）が市民に浸透しておりカルチャーショック。帰国して陸測二十万分の一帝国図図式など画定の基礎をつくる。（原田英一説）

これと対照的な小野三正説もあり、伊能忠敬のように天文、数学が得意な木崎は、卒業後三角科任官を希望したが抜群の製図成績が故に容れられず製図科へ。然るときサポータージユのかどにより懲戒免官、「独立民業への機運熟す」というもの。（「測量」vol. No.

4 小野三正著 「地図の半世紀」日本測量協会）

明治二十九年自宅に「政教図閣」を設立。

処女作「日本交通全図 151 X 261」庚寅新誌社から発売。

同三十一年交通図姉妹編を富山房から発売。

同年博愛館から全国へ 一／五十万輿地図の刊行開始

おそらくこの附録の地図の注文を受けた頃は、政教図閣の立ち上りの時期を経て、各種方面に展開し始めたタイミングと思われる。

ここにもあるように全国地図の刊行を開始したあとであり、スタイルの違う分県地図は、木崎を中心とする政教図閣にとつても新しい分野であったと思料される。

木崎の業績は、多くの後継者を育てた部分にもあり、

(中略)

多くの子弟や製図家、彫刻家を育成し、近代民業地図界の源流そのもととなる。

内弟子に実弟の純一、龍尾。

高弟小野三正、次いで佐々木武夫、原田英一など。

(製図家) 藤沢藤房、藤沢一郎とその高弟小川彦平、森芳雄、川俣鉄也など

(辻野民雄氏日本国際地図学会平成十四年度定期大会発表「民間地図近代化百周年」講演資料)

と、この朝鮮地図の製図をおこなった藤沢藤房の名前もあがってくる。

木崎の生涯については同じ辻野民雄氏の労作「民間地図近代化の開祖『木崎盛政』」(地図ジャーナル、一九九七―九八、日本地図調製業協会)に詳しい。

(9) 朝鮮と『日本』、国友重章

『日本』の朝鮮全図についての社告は続く。

朝鮮の地図は世上其類に乏しからずと雖も多くは齒葬杜撰見るに足らず。我が社今回の地図は東、浦塩斯徳より南長崎及西北威海衛、旅順より松花江一帯の地を包括するものにして何れも最新最確の材料を精選したるもの。

たしかにこの地図の構図からいえば、朝鮮半島という存在が、日本、中国、ロシアという国々に囲まれた危うさを感じる地勢学的位置があぶりだされているようにも見える。

明治三十五年一月一日の紙面は

- 朝鮮雜記
- 韓国人の性格
- 韓国人の正月
- 韓国の音楽及舞曲
- 韓国獵虎軍
- 韓国人の風習
- 韓国人の娯楽
- 韓国に於ける書画及他の名家
- 韓国の妓生

と題名からも何うことができるように、実につつこんだ多様な特集を組んでいる。

柴四朗は明治三十六年、その故郷会津に図書館が設立されるときに、自らの蔵書の多くを寄贈した。

たくさんの洋書を含むその蔵書の中に、東亜同文会の会則と会員名簿が所蔵されている。

近衛篤磨を会長とし、池辺三山らとともに活動の中心となっていた東亜同文会は中国のみならず、朝鮮にも支部を展開していた。

この会員名簿にも国友重章を朝鮮の常任委員として、漢城、平壤にその組織を展開していたことがわかる。

国友重章という人物は、国会図書館憲政資料室の「国友重章関係文書」の旧蔵者履歴によれば、文久元年（一八六一）熊本生まれ。西南戦争に佐々友房の下、熊本隊で活躍池辺三山の父、池辺吉十郎のもとで戦ったことになる。明治十六年上京、宮内省に出仕、のち法制局に転じる、明治二十年後藤象二郎が提唱した大同団結に賛同、官を辞して『東京電報』（明治二十二年『日本』に改題）の記者となり陸羯南と国友の出会い、この官庁勤め時代のことであったと推定される。『日本』の前身である東京電報では創刊当時から活躍し、兄弟誌である「日本人」にも多くの寄稿をしている。

大隈重信の条約改正交渉には対外硬の立場から批判、明治二十五年『東北日報』主筆、明治二十六年朝鮮『漢城新報』に入り日清戦争時点には朝鮮において健筆をふるった。明治二十八年十月閔妃殺害事件に

かわり広島で投獄される。この事件については謎が多いが、当時の朝鮮公使が三浦梧楼、柴四朗も現地におり、そして国友重章もいた。初期の『日本』に多くの寄稿を行っていた与謝野鉄幹も現地にいたが、事件の当日は遠隔地にいたため起訴されていない。

明治三十一年東亜同文会幹事をしており、東亜同文会は、陸羯南の東亜会、近衛篤磨の同文会が、明治三十一年に合併して設立された。国友は東亜会からその幹事をつとめている。

のち国民同盟会、対露同志会にも参加し、アジア主義を唱える。明治四十二年死去。

新聞人であり、政治活動家であった国友は羯南にとっても良き盟友であった。その生涯には未明の部分が多く、今後の研究が待たれる。

当時の朝鮮は、日清戦争の終結の下関条約により、清は朝鮮が自主独立国であることを認めた。明治三十年、もはや清の服属国でなくなった以上、王号を使用することをやめ、国号を大韓と改め、大韓帝國と称した。この体制は、明治四十三年の日韓併合条約の締結により日本に併合されるまで継続した。中国、ロシアの影響力の後退により、日本の大陸進出の入り口の一つとなっていた。この朝鮮の地図は好評であったとみえ、その後の紙面には、地図の重版を行い、地図の販売のみも受け付ける、という広告もみられる。（明治三十五年二月二十日第五面）

(10) 『日本』本紙の各地のイラスト

この地図の発刊日の『日本』本紙の特集には、各県の名所旧跡のイラストが掲載されている。

画家の名前は記されていないが、写真が紙面に本格導入される直前の数年であり、それまでの字だけの紙面から、ほんの少しの試みだが、結果的には大きな変化を与える効果を生んでいる。今はもうほとんど失われているだろう百年前の日本各地の風景を、『日本』の本紙では是非ご覧頂きたい。

面白いのは沖縄県のイラストである。

他の県が名所旧跡を中心に取り上げているが、沖縄については

沖縄一島與那国島通用文字

というイラストがかかげられている。

これは與那国島で通用している象形文字の紹介で、この時点でも古代風の象形文字の名残が通用していたことがわかる。(明治三十五年九月十日 第四面)

逆に京都は、イラストを紹介する名所旧跡が数多くあるものと思われるが、その数が多いがゆえにイラスト抜きで、京都市各地を分類し、三面にわたって、神社仏閣、名勝旧跡のみを紹介しており、完全な観光ガイドに徹している。(明治三十六年八月七日 第三面から第五面)

(11) 露西亜全図

明治三十六年十月二十二日には次の社告が一面トップに掲げられた。

社告

天長節付録 露西亜全図(四六半裁三回摺)

風雲暗澹滿州の天を蔽ひて大事未だ決せず

百萬の貔貅劍を撫して駿馬秋風に嘶き二十萬の騰騰煙を吐て夜々

風浪に激す

樽俎道あり廟堂人なきに非ずと雖も屈辱度あり国民深慨存す

吾人天長の嘉節を卜し露西亜全図を作りて内外の読者に頒たんと

す旗何処に樹つべく

馬何処に飲ふべき

吾人の天職固と東洋の平和に在りと雖も

平和の敵を敵とする能はずんば夫の天職を奈何せん

露西亜の南下は滿州地域への進出にとどまらず、朝鮮半島への動きも明確化しており、先述の韓国王妃の殺害事件も、韓国王朝内部の露西亜派、日本派の暗闘の一部が噴出した事態と評する向きもある。

近衛篤磨は、東亜同文会活動の延長として、明治三十三年の国民同盟会活動を展開、そして明治三十六年八月には対露同志会を組織した。

羯南はこの年、近衛篤磨の依頼を受け、その実弟で旧藩時代の主君筋にあたる津軽英磨をベルリン留学から呼び戻すために、六月からアメリカ經由ヨーロッパに向かっていた。

アメリカを横断して、ヨーロッパへ船旅を行いベルギーに上陸した。

ここで羯南は、司法省法学校時代の親友のベルギー公使の加藤拓川に会う。ベルリンで津軽公に会った後に、丁度欧州視察に来ていた東大医学部の創設者の一人の医学者、東京帝国大学医科大学校長の青山胤通とともにロシアを旅した。

その旅行記は、「閒文字」と題されて翌年の日露開戦以降の明治三十七年六月二十一日から九月十六日まで全五十六回にわたって『日本』に掲載される。

羯南にとって最初にして最後となった欧米視察の旅については別稿に譲るが、この露西亜全図はこの視察の賜物と見ることもできる。

この地図の製図は日本の同時代の製図方法と違っており、この地図が現地地図の翻刻と見ると、羯南がロシア行の途中で購入し、日本に送り、それをもとに翻刻された、と考えられる。

この地図の印刷は、他の地図が日本新聞社のグループ印刷所であった成章堂であったのと違い信陽堂印刷と欄外に記されている。

信陽堂は、岡村竹四郎と山室政子夫妻の経営になる印刷所であった。

山室政子は、安政五年（一八五八年）に信州岩村田藩の重臣であっ

た山室直高の五女として誕生。

明治七年（一八七四年）に上京、神田駿河台のニコライ神学校の寄宿舎に入った。

工部美術学校の開設と同時に入学し、第一期生として西洋画科に学んだ。教官のイタリア人のフォンタネージについて絵を学び、寄宿先のニコライからは石版印刷術を学んだ。同窓に山下りん、浅井忠、小山正太郎がいた。在学中、同郷の岡村竹四郎と結婚し、石版印刷業の信陽堂を開業した。

ニコライは当初政子をロシアに留学させイコン美術を学ばせることを企図していたようだが、彼女の結婚で果たせず、かわりに山下りんが留学することになる。山室政子は、ニコライ神学校にいたことからロシア語を解したものと思われる。

ロシア語を解する人間のいる印刷所、ということ、この地図の翻刻がこの印刷所に依頼されたことは想像にかたくない。

このロシア地図の付録がついた当日の本紙には西比利亜鉄路の特集が組まれていた。

シベリアの面積、人口比較、都会、シベリア鉄道里程などが紹介される。

モスク大連間の里程及時間

今や莫斯科、ダリーニイ即大連湾青泥窪に至る線路全長は八千一百十露里、直行時間十三日と一時五十六分にて通行するに至れ

り。

(東邦協会報告抜粋)

日露もし戦わば、モスクワからこの鉄道をつかつて、次々と増派の兵力が送られてくる、ということを想起させる記事である。

(12) 府県地図の完結

明治三十六年十二月二十七日、年末も押し詰まった一面トップに次の社告が掲載された。

社告

各府県道庁台湾管内地図の完成

本社が一昨年より引き続き本紙の附録として発行したる各府県管内地図は本日を以て愈々完成を告げたり。其刊行せしもの左の如し

以下、第一回の東京から、当日発行の香川県まで、四十八の地図のリストが発行順に並んだ。

最後の十一月、十二月は、まるで翌年の日露開戦を予測していたかのように、矢継ぎ早に月に二回の発行となっていた。

一部売四銭、全部取揃へ一円五十銭を以て其求めに應ずべし、但し郵税は本社之を負担すべし。

単純な毎号の売り切り附録ということではなく、残部もあり、またセット販売をしたことがわかる。

まだどこかにこの地図の全部揃いが眠っている可能性もあることを予測させる社告である。

(13) 日露戦争関係地図

羯南は、明治三十六年六月に出発した欧米視察の旅から、翌明治三十七年一月二十四日、欧州からの最後の船便となった日本郵船の鎌倉丸で帰国した。

ある意味で、開戦直前の引き上げ船となったこの船に他に誰が乗っていたのかは、当時の乗船名簿が見つからない今となつては知る術もないが、日露開戦の直前の船上でかわされた会話は想像にかたくな

い。
近衛篤磨とその関係の人々に任せたはずであった日本新聞社とその経営も、その篤磨が一月二日に急死したことで全て吹き飛んでしまつた。

日本帰国から二週間で日露開戦。

羯南は再び戦争報道と新聞経営のトップに立つことになった。

明治三十七年八月十日の一面トップに以下の社告が掲載された。

社告

旅順新地図

十五日、日本画報の外、旅順附近の詳細なる地図を附録として発行す。

時あたかも、乃木希典將軍の率いる第三軍が旅順要塞の攻略準備に入っている時期であった。

明治三十七年八月十五日

本日の附録

本日は本紙八頁の外附録として日本画報第六号及

旅順附近新地図を添付したり

日本画報の第六号は鹿子木孟郎の叙情的な表紙絵「万里遠征の情」から始まり、東郷平八郎の名刺、日本艦隊の根拠地の写真、コサック騎兵のスナップと続き、日本画報のシリーズの中でも最も印象的な

満州軍総司令官の送別会に列したる文武官

が掲載されている号である。

これは、満州軍総司令官に任命された大山巖の出陣にあたり、当時の明治政府の文武の主要リーダーたちがそろって合同写真をとったものである。

大山は維新の戦いから、幾多の戦場を踏んできた古強者、それを送る伊藤博文をはじめ各界のリーダーたちもともに時代を生き、それぞれの立場で明治を作り上げてきた人物ばかりである。

この日本画報とともにしていたのが「旅順附近新地図」であった。

上面に関東半島、即ち遼東半島の略図が添付されその下に、旅順港を中心とした半島の先端が詳細図として描かれている。当時の読者にとっては、これから毎日の報道でその戦局が報じられる場所である。

この後、日露戦争の戦局展開に伴い、『日本』の本格写真雑誌附録の、日本画報の中にも左記のように地図が包含された。

遼陽付近地図（明治三十七年九月五日 日本画報 第七号）

旅順付近地図（明治三十七年十二月五日 日本画報 第十三号）

これらはより詳しい戦闘地域付近の地図であったが、くわしくは日本画報を御参照されたい。

中国大陸の地図に始まり、日本の各府県、台湾を含む、の地図、そして朝鮮、露西亜、最後に日露戦争の激戦地の地図を順にめぐってきた。

地図は客観的な地勢を現わすものであるとともに、極めて政治的な意図を含んだものであったことが如実に見てとれる。

羯南をはじめ古島一雄たちの編集スタッフたちの、あえてこの経営難局の時期に、付録の地図を製作して読者、国民に訴えたかったことは何だったのか、それはこの地図とその裏面の統計データ、本紙の各県特集を通して充分に伝わってくる。

6. 東亜同文会と羯南、政治活動家としての羯南

陸羯南は、明治期から太平洋戦争の終盤まで続いた日中関係の団体、東亜同文会の最初の幹事長であった。その機関誌「東亜時論」にも、彼の文章が発表されている。

一般に羯南は明治期を代表する新聞人の一人として評されることが多いが、改めて彼の生涯の業績をたどってみると決して「新聞人」だけの枠におさまった人物ではなかったことが見え隠れする。

例えば、明治十二年から十三年にかけて、故郷の青森で「青森新聞」の編集長を勤めていた間、自由民権運動がおこった。その運動は、一つには国会開設の建白という方向をとったが、明治十三年三月二十七日、青森県内で会合が持たれた時に、その出席委員として、羯南は参加している。この時点での彼の運動への関与の度合いについては、現在残されている資料では、これ以上知るすべもないが、この時期の知識層の青年として、ごく自然に、政治的な志向性を持っていたのではないかと推察される。

その後、羯南は、再び東京に出て、太政官での官報発行の業務を経験し、明治二十一年新聞『東京電報』を、そして翌二十二年には、新たに新聞『日本』を創刊する。この『日本』の紙面で、羯南は健筆をふるい「政論記者」としての名声を確立した。

新聞社の社主であり、政論記者としての活躍のなかでも、明治二十四年五月には東邦協会へ参加、また明治二十七年六月には全国対外硬派大懇親会の発起人にもなっている。

日清戦争をへて、中国を中心としたアジアと、列強、特に南下政策をとる対ロシアをめぐっての対外政策についての議論が高まる中、明治三十年、東亜会が結成された。この会にあつては、三宅雪嶺、池辺三山、犬養毅らとともに羯南も中心人物の一人であった。

東亜会は、翌明治三十一年十一月に、近衛篤磨を中心とした同文会と合併し、東亜同文会となっていたが、この会の、最初の宣言書ともいふべき「東亜同文会主意書」は、羯南の起草によるものとされている。

羯南が、日本新聞社の社主、主筆の立場から一歩踏み出し、こうした会の中心人物になっていったのはなぜだったのであろうか。

司法省法学校の同期生の原敬は、羯南と共に、所謂「賄征伐事件」をきっかけに法学校を中途退学した。其の後、郵便報知新聞社に入り新聞記者となった。更に、大阪の大東日報の主筆を経て、明治十五年井上馨の紹介で外務省に入省した。

羯南が故郷の青森新聞の編集長から北海道紋別製糖所を経て、品川弥次郎の紹介で太政官の文書局に入省したのと似ている。

原は、外務省から農商務省に転じ、明治二十二年には農商務省参事官となった。

羯南は前述のように、その前年官を辞し、谷干城、杉浦重剛らの後追しにより「東京電報」を創刊、翌年それを更に「日本」へと発展させ刊行している。

羯南が「日本」を中心に盛んな政論活動を展開している間、原は官

吏としての栄達をとげ、閔妃殺害事件の混乱の後の收拾をはかった小村寿太郎朝鮮公使の後をうけ、明治二十九年朝鮮公使となっている。翌明治三十年には知人の懇請を受け大阪毎日新聞に入社、三十一年にはその社長、と再び新聞人の世界に戻った。

羯南と原敬が、互いに、その生き方を意識していたわけではないが、共通の友人であった加藤拓川の回想が残されている。加藤も含め、共に司法省法学校を中退した時を回想した内容である。

「其時陸が僕にいつた事を今に記憶して居る、原は翩々たる才子に非ずとは思ふて居たが、斯迄正義を重んじ責任をずる人とは知らなかつた。其後は原の為人を重んじて、別段親しくして居たようだ。」

(朝日新聞、明治四十年九月六日)

羯南も原も共に、新生の明治期にあつて、日本のあるべき姿を生涯追いつけた人物であり、その主張として「政論」を新聞で発言した。

目指すところは、政論の実現であり、所謂既成の「政治家」たちにその実現が期待できないとなれば、自らその実行のために動く、というのは極めて自然の姿であつたのであろう。現代のように全てのことが分業化され、人間の役割も細分化されている時代とは違い、明治期を生きた人々は、自ら考え、それを自ら実行する時代であつた。

「東亜時論」には、その意味で羯南の同志ともいふべき人々、三山池辺吉太郎、湖南内藤虎次郎(この雑誌の編集長を勤めた、との記述もある)、別天長沢説らが、その文章を寄せている。また、戊戌の政変で、日本へ亡命、羯南らが一時期その保護をしていたとされる中国

の政治家活動家でジャーナリストの梁啓超も中国の政治情勢を日本の世論に訴える論説を展開している。

また注目すべきは、羯南の同郷の弘前出身で、常に往来の盛んであつた笹森儀助が、彼の推薦で東亜同文会の囑託となつて朝鮮へ渡り、朝鮮各地、またその動静が注目されていたシベリアの現地報告を発表していることである。笹森は、ある意味で羯南の分身ともいえる部分もあり、羯南、そして東亜同文会幹部の興味を持った地域を訪れては、その報告を書いていた、とも言える。

『東亜同文会報告』は、東亜同文会最初の機関誌であつた『東亜時論』の後継誌である。『東亜時論』は明治三十二年十二月の二十六号に「廃刊の辞」の最後を次のように結んでいる。

廃刊の辞

吾輩は敢て筆を茲に投つと雖とも、本會の實動は、言論以外に大に言論するものありて存するを自信す。天下有識の士希くは斯言を記せられんことを。

そして巻末に「特別会報」を載せている。

今後清韓両国支部及事業主任者其他会員よりの精確なる報告通信は毎月一回報告書(非売品)として御回送可致候に付従来は東亜時論に掲載を憚りの材料も機敏に入御覧出来可申奉存候此段豫得貴意度候間左様御諒知可被下候也 (東亜時論第二十六号)

発行形態を東亜同文会の会報として内部文書とすることで、「掲載を憚りの材料」も掲載していくという方向転換の宣言である。

『東亜同文会報告』の第一回から四回については、日本国内に所感している機関がなく、今後の更なる調査を継続したい。

この間の日本は、義和団事件への出兵、日英同盟の締結、日露戦争、といやおうなしに国際関係の荒波にのみこまれていった時期である。

羯南自身も、東邦協会、東亜同文会、国民同盟会、対露同志会等の活動を通じ実際の政治の世界に近いところに身をおいていたが、本業の新聞事業は苦境に立たされていた。

日清戦争当時の発行部数をピークに、その紙面内容が徐々に時代にあわなくなってきたこともあり、その部数は漸減をしていき、社主である羯南は本来彼が目指した新聞を通じての自己の政論の発表ということよりも、その新聞経営のための資金繰りに奔走せざるを得ない状況に追い込まれていった。

明治三十五年には、近衛篤磨の支援により資金の調達を行い、本来自主独立の新聞は、結果的に「近衛のグループの新聞」的な存在になり、羯南自身も経営から身を引かされた。三十六年には、冷却期間のために、近衛の弟である津軽英磨をドイツから連れ帰る、という名目のもとに、欧米視察の旅に出されてしまった。

しかし、運命の皮肉な女神は、三十七年一月に篤磨を四十二歳という若さで天に連れ帰った。急ぎ帰国した羯南も直後に勃発した日露戦争の報道合戦に再び体調を崩し、日露終戦後程ない四十年に、五十歳で逝去してしまう。

「東亜同文会報告」は、東亜同文会をつくった二人の死の後も三年続き、その舞台である中国で辛亥革命がおこる前年に、後継雑誌である「東亜同文会支那調査報告書」にその役割を譲る。

羯南は、前述したように、東亜同文会の最初の幹事長であったが、就任してから半年ほどたって、明治三十二年の六月に佐藤正と交代している。

幹事長は始め陸實氏なりしが合氏の主管せる新聞事業の遽に繁忙を加へ来りしより已むを得ず其任を辞退せられたるを以て佐藤正氏を推薦して其後任を依囑せり（東亜同文会第六回報告）

しかし、その後も評議員として会の中心人物として残り、東亜同文会の活動を継続している。

機関誌「東亜同文会報告」にも、会報の中や、会員動向、各種会議の出席者の中などの随所にその姿を現わしている。

中でも明治三十四年八月に発行された第二十一回報告の中には、羯南の「東亜の平和、附（満州開放の利益）」と題する講演記録がある。

羯南の「新聞『日本』」には、のちに青年教育活動で有名になり、青年団運動の先覚者、と呼ばれている広島県沼隈郡出身の山本滝之助の呼びかけで発足した愛読者団体である日本青年会があった。その会員雑誌である『日本青年』は、同時代の地方に生きる知識階層の青年たちの生活実態、その政治的意見、日露戦争に従軍した青年たちの記録などが掲載されており、青年研究、社会運動研究、社会心理研究の

素材として極めて豊富な材料を包含し、掲載されている。そこには、随所に新聞日本の社主で主筆の羯南の座談や三宅雪嶺、中村不折、福本日南、杉浦重剛などの新聞日本の主要な関係者の講演、著作等が掲載されている。『東亜同文会報告』の中の講演は『日本青年』にある羯南の座談記録以外では、唯一の彼の肉声を伝えるものである。同じ号の会報部分には

近衛公の一行

近衛公には会員松崎博士及板東神谷二氏を随へ七月十五日新橋を発せしが是より二日前に出発せし陸氏と神戸にて落合ひ十四日弘済丸にて宇品を解纜し十八日天津に着せりとの報あり因に云ふ一行は天津北京の視察を了へは路を轉して山海關、牛莊、大連を経へて朝鮮に立ち寄り仁川京城其他の要地をも巡回する筈なりと云

と書かれていることから、中国への旅に出発する前に行われた講演と史料される。

「私は平和と云ふことに就て一寸考へた事がありますから、それを申し上げやうと思ひます」で始まる講演で羯南は、日露開戦の世論の多い中で、日本一国の力でアジア地域の平和を守ることの難しさを説いている。そこで、特に満州地域の平和を維持するためにも一国の利権を認めるのではなく、アメリカ、ヨーロッパ各国に市場を開き、共同管理の形態にする、すなわち、満州開放論、というのが、彼の講演の主眼となっている。

もしこれが実現できていたら数年後の日露戦争もなく、その後の中国市場の覇権をめぐる日米戦争もなかったかもしれない。ロシア革命のちに、白系ロシア人の多くが満州に逃れてきたり、満州帝国の国際的孤立を救うためにナチスドイツに迫害されたユダヤ人を満州に受け入れるプランがあったり、歴史は結果的に類似する試行錯誤を繰り返した。多民族による平和の維持の難しさは人類は過去に何度も経験している様に不芳な結果に終わった。

東亜同文会の後継団体である霞山会が昭和六十三年に発行した「東亜同文会史」の最初のページには四人の東亜同文会の重要人物の写真が掲げられている。

近衛篤磨、荒尾精、根津一に交じつて羯南の写真もそこにある。陸實とキャプションされた羯南の写真は、何故か他では見られない中国服姿である。

この写真が近衛との明治三十四年の中国への旅の時に撮られたもので、この時に羯南のいだいた日中関係に関する理想は今も生きていると信じていたい。

この一連の東亜同文会関係の資料が、日中関係の初期的段階を研究する資料となるとともに、陸羯南の政治活動家としての新たな一面としてその政治的理念的の端緒となることを念じてやまない。

7. 陸羯南研究会文集「陸羯南と新聞日本の人々」

以上のように、徐々に活動している研究会だが、青木彰教授の七回忌にあたった二〇〇九年には、それまでの各自が書いた各種の論考をいったん私家版の形式の文集「陸羯南と新聞日本の人々」にまとめた。以下は、その目次である。

- 『陸羯南と新聞〈日本〉の人々』への序文 元朝日新聞社長
中江 利忠
- 昂揚した気分には…… 司馬遼太郎記念館館長
上村 洋行
1. 司馬遼太郎の描いた陸羯南
アンソロジー 司馬 遼太郎
- (1) 坂の上の雲
(2) ひとびとの聲音
(3) 街道をゆく 「北のまほろば」
(4) 書簡
(5) 徳 〈この国のかたち〉から
(6) 街道をゆく 「秋田県散歩」
(7) 街道をゆく 「神田界限」
(8) 街道をゆく 「瀧のみち」
(9) 街道をゆく 「中津・宇佐のみち」
2. 司馬遼太郎から青木彰への遺言 青木 彰

- (1) 司馬遼太郎さんと新聞
陸羯南にみていた新聞人の原点
- (2) 陸羯南への思い
司馬遼太郎の足音
- (3) 司馬遼太郎からの手紙
3. 「陸羯南研究会」への大いなる期待
天野 勝文
4. 熱き弟子たち
山本 泰夫
5. 新聞『日本』の時代の広告(序論)
竹沢 泉
6. 浪人・末永節
大内 龍太郎
7. (1) 街道をゆき羯南をゆき青木彰をゆく
山田 淳
- (2) 柴四朗と三つの戦争
波澤 洋
8. (1) 谷干城と羯南
(2) 菊池九郎と羯南
(3) 高浜虚子と正岡子規
(4) 井上 剣花坊
9. 古島一雄と羯南
石神 由健
10. (1) 新聞日本と囲碁
塚本 幹夫
- (2) 明治の言論人
菅原 秀夫
11. 陸羯南の書
風間 正人
12. 新聞日本のスポーツ報道
原田 亮介
13. 近時政治考
高木 宏治
14. (1) 篤磨と羯南

- (2) 日本画報 解題
 - (3) 解題 新聞『日本』附録地図集成
 - (4) 子規に見せたかった世界
 - ―新聞「日本」附録「日本画報」―
 - 15. 羯南の娘たちの旧家を訪ねて 寺田 浩章
 - 16. 羯南と野間清治と 鈴木 宣幸
 - 17. 青木彰と羯南 松山 耕二
 - 18. 雪嶺と羯南 小仲 秀幸
 - 19. 池辺三山―最初の海外特派員 秦 融
 - 20. 現時政論考 乾 正人
 - 21. 組織人としての千葉亀雄―読売時代を中心に― 東 一真
 - 22. 27歳、正岡子規・編集長、奮闘記 近藤 主税
 - 23. 羯南と鉄道 岡本 聖堂
 - 24. 「埃及通信」―現代海外特派員通信― 浜口 武司
 - 羯南とエジプト
 - 25. 商業電報・東京電報・日本 三紙の商況欄比較 岸田 浩
 - 26. 新聞「日本」の社会面 菊池 功
 - 27. 愚庵と羯南 広川 一人
 - 28. (1) 黄泉還り対談 大山 洋三
 - (2) 随談落語・・・根岸界限・正岡子規 (演者・・・二代目・林家三平を想定して)
 - (3) 正岡子規の三五のテレビア
 - 29. 子規庵の周辺のこと
 - ―陸羯南・四女・巴さんを囲んで― 最上 巴
 - (インタビュー) 首藤 紀慶
 - 30. 羯南・祖母たち 特別展に寄せて 今西 久穂
 - 31. 特別掲載 最上家所蔵「陸羯南関係史料」の概要 最上 義雄
- 〈あとがきにかえて〉
- 新聞附録『日本画報』を復刻
- ―陸羯南の『日本』が日露戦争中から発行した全四二号―
- (日本経済新聞二〇〇八年五月二八日号より抜粋)
- 陸羯南研究発行に寄せて 産経新聞社代表取締役社長 住田 義孝
- 会員各自の興味の方向性によって、羯南の種々の側面、羯南をめぐる様々な人々を取り上げている。
- 司馬遼太郎氏が、その生涯の著作の中で、あちこちで書いている羯南についてのアンソロジーも収録した。
- 「坂の上の雲」でとりあげた後も、実に多くの作品の中で書いていることがわかる。
- あわせて、羯南の御子孫の皆様のご了解を得て、あまり一般の目に

ふれていない、羯南の娘さんに取材したインタビューを収録できたことは、記録資料としての価値を得たと思う。

8. 弘前の陸羯南会

羯南の生地、弘前では、二〇〇七年の、没後百年の記念行事を機に、地元有志を中心とした、陸羯南会が設立された。

二〇〇八年十月十四日、弘前ではその発足会が催された。

功績伝える活動に意欲 弘前で陸羯南会の設立総会

弘前市出身の明治の言論人・陸羯南の功績を伝え研究を続ける待望の「陸羯南会」が発足し、設立総会が生誕日の14日、同市立弘前図書館で行われた。

今後、羯南とその関係する人々の研究・顕彰を図り、講演会や感想文募集、会誌発行などさまざまな事業を展開する。

弘前市出身の明治の言論人・陸羯南の功績を伝え研究を続ける待望の「陸羯南会」が発足し、設立総会が生誕日の14日、同市立弘前図書館で行われた。

今後、羯南とその関係する人々の研究・顕彰を図り、講演会や感想文募集、会誌発行などさまざまな事業を展開する。

設立総会には発起人の鳴海康安さん、羯南研究家の稲葉克夫さん、館田勝弘県郷土作家研究会代表理事らのほか、石岡徹弘前市教育長、新渡戸満男弘前商工会議所会頭、斎藤三千政弘前ペンク

ラブ会長ら20人が出席。

発起人を代表して鳴海さんが「継続し活動を進めていくことが大きな力となる」とあいさつ。石岡教育長が「昨年のパワーが会の発足につながった。自由な活動を期待したい」と激励した。

会長には事務局長兼任で館田さんを選出、副会長は笹森建英弘前学院大学教授らが、顧問には新渡戸さん、鳴海さん、稲葉さんが就任した。名誉顧問には相馬鋳一市長を予定している。

総会では設立趣旨、規約、予算案などを決めた。

活動計画では来年1月24日に設立記念講演会を開く。中学生を対象とした羯南伝記を通じた感想文や夢を募集、研究・調査内容を掲載した機関誌「陸羯南会誌」も年1回発行する。

松山子規会との交流、俳句大会の開催なども予定し、活動として実行していく考えだ。

館田会長は「歴史のあるものに作り上げていかなければならない」と決意を示した会では年会費3千円で会員をこれから募集、寄付金なども募って活発化を目指し、広く羯南の功績を伝えていく。

陸奥新報 二〇〇八年十月十五日

発足に先立ち、青森の東奥日報は、社説に取り上げた。

研究を深め永く伝承を／「陸羯南会」発足へ

明治を代表する言論人・陸羯南（弘前出身、本名・中田實）を研究する「陸羯南会」が生誕の十月十四日、弘前市で設立される。

二〇〇七年に、同市で催された「陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業」で『日本』新聞の主筆兼社主だった羯南の存在が取り上げられた。

市の支援を受けた事業で、明治言論界の巨星は県内外の関心を集め理解も徐々に深まった。

この動きを契機に、「羯南の精神や功績を後世に伝え、『日本』のもとに集った多くの県人の研究を進める必要がある」との機運が強まり、同記念事業の発起人でもある有識者らを中心に設置の運びとなった。

陸羯南は日本が近代国家へと向かう激動の明治期に、当時の政府の極端な欧化主義に反対し批判、国民精神の発揚と国民の公益と独立を目指す「国民主義」を唱えた。

新聞発行停止などの政府の弾圧や苦境に屈することなく、言論を貫いたジャーナリストだ。

会発足では羯南研究を掘り下げ、永く伝承していくことが求められる。

今後、一般会員を募っていくというが、幅広い賛同を求めていくべきだ。

陸羯南は戦後、政治学者の丸山眞男氏の論考「陸羯南一人と思

想」により再評価されたといわれる。

それ以前、明治きつての人物評論家・鳥谷部春汀（五戸出身）が「明治期の新聞界における羯南・陸實氏の位置はほとんど絶対的なりといふも可なり」と評したことで知られる。

羯南研究の出版活動は盛んだ。

〇七年に、同記念事業などの一環として、一八八九（明治二十二年）年の創刊時から一九〇六年までの「日本」の社説、著作を網羅した「陸羯南全集」が復刻。

地元出版界からは「陸羯南の津軽」（稲葉克夫著）など、今年四月には東京都の陸羯南研究会の協力で「日本」付録の写真グラフィック「日本画報」（全四十二号）も再生された。

羯南研究はますます熱を帯びている。

明治と現代の政治・国際状況は大きく異なる。

しかし、羯南の論は今に通ずるものがあるといわれる。

明治の激動の一端を知るとは、今の日本、ふるさとを見詰め直し、未来を探ることにつながる。

羯南とその時代を学ぶ意味は、そうした点にもあるのではないが。

羯南は「日本」に入社した正岡子規（松山市出身）の素質を見抜き、生涯支えたことでも知られる。

日本の俳句・短歌の革新を成し遂げた子規だが、地元には一九四三年に発足した「松山子規会」（会員約三百五十人）という著

名な組織がある。

「子規の父」ともいえる陸羯南の研究会が立ち上がることは、子規との関係においても意義があるのではないか。

「名山名士を出（いだ）す……」。

羯南が弘前に残した不朽の名作（詩）には故郷の若者を励ます思いがあるといわれる。

「願わくは一片の名、留めて千載の史にあらんことを」は羯南自作の漢詩「吾心」の中の一文。

二十代の青年羯南は、千年後に名を残したいとの志を表現していた。

いま歳月を経て、ふるさとの人たちの手でその陸羯南に小さな灯がともる。

偉人の足跡をたどろうとする新たな歩みに期待したい。

東奥日報 二〇〇八年十月十日 社説

大正以降から、何回か羯南を顕彰する会が出来ている。

大正八年九月、陸羯南の十三回忌に再版された著書〈原政及国際論〉の前置きにも陸羯南会が出てくる。

青森出身の新聞日本で活躍した小山内大六、没後出版された「羯南文集」の編集をした梶井盛、愛媛出身の子規門下の歌人であり新聞日本でも短歌欄を担当した森田義郎らがこの会の発会を主唱していた、との記述がある。

弘前の稲葉克夫先生の御著書〈陸羯南の津軽〉のあとがきには、弘前でのこれまでの陸羯南研究の動きが書かれている。

このあとがきによれば、これまでも

昭和四十九年 陸羯南を語る会

平成十年 「陸羯南賞」創設準備委員会

の動きがあったことがわかり、そして陸羯南生誕百五十年没後百年記念実行委員会につながっていった。

戦後の陸羯南研究の歴史の中では丸山真男の論文が嚆矢としてあげられるが、弘前でも鳴海康伸先生の陸羯南顕彰の活動は改めてその大きさを強く感じる。

その編集された〈羯南陸実先生〉は小冊子ながら年譜、主要論文、書簡、関係者の追憶を網羅しており、新刊で陸羯南の著書が入手し難い現在、かつてアメリカの研究者バーバラ・J・テイターズも懇望したように、またその復刊が期待される。

これらの活動に参加された相川文蔵氏には『陸羯南おぼえがき』（昭和四〇年）、『郷土の先人を語る 陸羯南』（昭和四二年）の著作がある。

また川村欽吾氏が東奥日報、東奥義塾紀要などに書かれた「陸羯南をめぐる人々」のシリーズは、伊藤重、赤石定蔵、珍田捨己、北里柴三郎、加藤拓川、賀古鶴所などの関係者を網羅しており、特に陸羯南晩年の片腕として活躍した赤石本人にも取材した「赤石定蔵と陸羯南」は、陸羯南の経営者としての苦闘を語る部分も含み非常に貴重で

ある。川村氏の論文には、全集に所収されていない資料を参照されたことを示唆する部分もありその研究資料の分析も待たれる。

戦前に戻れば、東奥日報の文化部長も務めた文人・竹南長谷川虎次郎が、昭和初期に「羯南文録」の出版や、三十三回忌のおりなどにふれて書いた一連の〈陸羯南翁追憶〉もその時代を伝えて意義深い。

あけて二〇〇九年一月二十四日、陸羯南会発足記念シンポジウムで、話をさせて頂く機会を頂戴した。

講演のテーマは、「陸羯南と『日本画報』」ではありましたが、司馬遼太郎から青木彰に託され、そして我々青木塾の面々が羯南研究に参加することになった経緯から始まり、司馬さんの追悼番組に出演された青木先生のビデオをまず上映し、そして一時間にわたって、羯南の新聞人としてのユニークな活動の一端である、グラフ誌「日本画報」について説明致しました。

後半のディスカッションでは、地元弘前の羯南研究者のお三方に混じって、羯南の足跡、受け継がれた遺志を弘前出身者からの観点で光を当てることの意義を強調しました。

会場は弘前市立図書館の視聴覚室でしたが、約〇人の参加者が詰めかけ、補助いすを出すほどの盛況でした。東奥日報、毎日新聞、青森放送など、メディアの取材も入り、地元弘前での熱気を肌で感じてきました。

すずき

(陸羯南研究会ブログ 二〇〇九年一月二十五日)

その後、弘前の皆様は、毎年「陸羯南会誌」を発行され、活発な活動を展開されていらっしゃる。

9. 松山 坂の上の雲 ミュージアム

司馬遼太郎財団からのご紹介で、二〇一〇年に、松山の坂の上の雲ミュージアムの第4回企画展「新聞『日本』と子規」の展示のお手伝いをさせて頂いた。

企画展の概要は、以下のものであった。

概要

明治という近代国家において、新聞を中心としたメディアの成立と発展は、当時の人びとのあいだに国民意識を広めていくうえで大きな役割を果たしました。坂の上の雲ミュージアムでは、日露戦争を明治時代のジャーナリズムの視点から捉えるシリーズ「日露戦争と明治のジャーナリズム」を今後展開して参ります。

第1回目は、明治の言論界を代表する新聞『日本』と、日本新聞社の記者としてその生涯を終えた正岡子規をはじめとするこの新聞にかかりをもつ人びとに焦点をあてます。これは、文章日本語の形成における子規のはたした重要な役割についてふれるこ

ともなります。同時に、開戦期を中心とした内外の報道記事を通じて、世界がどのように日露戦争を捉えたかを展望します。

新聞『日本の時代』

新聞『日本』の誕生や、そこで働く人々のようす、子規の文学革新活動、新聞『日本』の報道に迫ります。

日露戦争とジャーナリズム

日露戦争の開戦期における国内外の報道記事などを紹介し、ジャーナリズムの視点から日露戦争に迫ります。

主な展示物

新聞『日本』創刊号

陸羯南書「名山出名士」（直筆）

当時の風刺画を立体化した模型

映像展示

（坂の上の雲ミュージアム ホームページより）

この企画は、「日露戦争と明治のジャーナリズム」と題する連続展示の第一回で、小説「坂の上の雲」の主人公の一人、正岡子規が、羯南の日本新聞社で働いていたこともあり、連続展示の記念すべき第一回の展示となった。

同ミュージアムは、新しく作られたことから、以前からの収蔵物はないので、順次展示作品を集めていく方式、その立ち上がりの過程にお手伝いさせて頂けたことは、大変貴重であった。新聞日本の附録の地図も一部展示して頂いた。

羯南の御子孫、弘前の郷土文学館等もご紹介させて頂き、新聞日本の縁で、日本各地が繋がる場となった。

展示期間中、日ごろからご指導を受けている、東京情報大学の有山輝雄教授、筑波大学の中野目徹教授とのミュージアムでの鼎談が実現できたことは、研究会の活動の記念となった。

10. 筑波大学での講義

陸羯南研究は、前述したように本来、司馬氏が青木教授と、筑波大学での研究会の開催を目指したものであったが、結果的にお二人の逝去により実現できなかった。

別途、青木教授の弟子の有志で、筑波大学で、〈青木彰記念講座〉を開催の動きがあったことから、その一コマに羯南研究の時間を頂き、ここ数年、講義をさせて頂いている。

以下は、その概要である。

陸羯南研究 一つの新聞社の興亡を通じて

1. メディア史というアプローチ

〈温故知新〉の精神

2. 「坂の上の雲」の主人公の一人

正岡子規の墓誌 〈日本新聞社員たり〉

3. なぜ日本新聞：陸羯南か
司馬遼太郎（青木彰）陸羯南研究会の系譜
4. 陸羯南（一八五七～一九〇七）という人物
新聞記者（青森新聞、官報）としての側面
新聞経営者（東京電報、日本）としての側面
政論家（近時政論考、原政及国際論）としての側面
政治活動家（東亜同文会、国民同盟会）としての側面
5. 新聞日本附録（分県地図）の希少性
（明治三四年一月～明治三六年十二月）四七県と台湾
官製地図と民間地図の発展の歴史
6. 新聞日本附録（日本画報）の持っている意義
（明治三十七年六月六日～明治三十九年十月二十一日）日露
戦争から戦後へ
日本新聞社が、経営的には非常に追い詰められていた時期
時代の流れは、政論新聞から大衆紙へ
スポンサー近衛篤磨（文暦の父）の急死
（明治三十七年一月二日）
陸羯南 七ヶ月にわたる欧米視察から帰国
（同一月二十四日）
日露開戦（同二月）
政治活動家としての側面を伝える資料
東亜時論（東亜同文会の最初の機関誌）
8. メディアの転換期
活字からイラスト～写真～動画～ネットへ
現代もおこっている状況
・新聞経営 ジャーナリズムVS. コマーシャルイズムの相克
現代も抱えている問題
・経営の苦闘の中での人材育成
子規 ジャーナリストと俳人（日本派）
（高浜虚子、河東碧梧桐、五百木瓢亭、石井露月、佐藤紅
緑、森田義郎）
国分青崖（漢詩）中村不折（絵画、書）井上剣花坊（川柳）
内田魯庵（翻訳小説トルストイ）
池辺三山、鳥居素川、長谷川如是閑（朝日）
丸山幹治（毎日）
千葉亀雄（読売）
言論の巨人たち：柴四朗（東海散人）福本日南、三宅雪嶺

9. 〈歴史〉から学ぶこと

長谷川毅氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学部教授）

司馬遼太郎賞受賞作〈暗闘〉（スターリンとトルーマン）

受賞スピーチ（歴史は、誰かがそこに光をあてないかぎり深い暗闇の中で眠っている）

世界同時不況（ナショナリズムの勃興）我々は1929年以降の歴史を再び繰り返すのか？

経済再生：グローバリズムの可能性、BRICsの勃興（文明の循環）

中国：アヘン戦争以降、約160年ぶりの世界国家への復帰、経済力を背景とした台頭

日本：米中二大超大国の狭間でどうやって生き残るか
自らの問題意識で、現代・未来を生き抜くために、歴史

見直す必要性

この講座を踏まえて、やがて発展型として、当初目指していた、各関係者の専門研究者の方を交えての、〈陸羯南と新聞日本の人々〉という連続講座の実現をはかっていきたい。

11. 筑波大学での展示会

筑波大学は、二〇一三年に、開学四十周年を迎える。

奇しくもこの年は、司馬遼太郎氏の没後十七年、青木彰教授の没後十年にあたることから、二〇一二年十月、筑波大学の学園祭の期間に、イベントとして、「司馬遼太郎と青木彰名誉教授展」を開催した（資料1）。

別紙のような資料（資料2）を中心とした展示会であったが、これをベースに、今後、大阪商業大学、弘前の郷土文学館、そして横浜の新聞博物館等での展示会の開催を相談している。

12. 研究会の今後の方向性 青木彰教授の十三回忌に向けて

今後の陸羯南関係の資料復刻については、下記のような資料が課題としてあがっている。

- ① 青森新聞
- ② 東京電報（商業電報）
- ③ 新聞日本のデジタル版による復刻
- ④ 新聞日本の附録、号外の集成
- ⑤ 東邦協会関係資料
- ⑥ 対外硬派関係雑誌（経世評論、活世界、二十六世紀等）
- ⑦ 新聞日本の愛読者団体の機関誌：日本青年

これらは、陸羯南と新聞日本の総合的な研究には必須な資料であり、順次復刻の実現に努力していきたい。⑤の東邦協会報告は二〇一三年六月に復刻することができた。

そして、二〇一五年が、青木教授の十三回忌にあたることから、司馬氏とともに計画していた、〈陸羯南と新聞日本の人々〉の書籍化を計画したい。

読者諸賢の御鞭撻を頂ければ、これに優るものはない。

(資料1)

(同展のプレスリリースから)

「筑波大学学園祭にて「司馬遼太郎と青木彰名誉教授」展 開催

2012年10月6日7日の二日間限定で、筑波大学学園祭「雙峰祭」の期間中、筑波大学教養教育機構（副学長阿江通良）主催「司馬遼太郎と青木彰名誉教授」展を開催致します。（筑波大学学生会館マルチメディアルーム）

筑波大学では、未来志向型グローバル人材の育成を図ることを目的とし、産業界等と連携し学外から講師を招き開設する科目『IMAGINE THE FUTURE. 未来構想大学講座』が行われています。開学40周年を迎える2013年には、新たに特別企画開催などの準備が進められています。「司馬遼太郎と青木彰名誉教授」展は2013年度に予定される特別企画のプレ展示企画として実施されるものです。

【企画意図】

筑波大学名誉教授青木彰（故人・1978～1989在学）は産経新聞時代の同僚・作家司馬遼太郎と報道の源流を探るため明治の新聞人陸羯南の研究を企図していました。明治の知識人・ジャーナリストを通して「日本・日本人」に迫ろうという、いわば「坂の上の雲」の続編ともいえる大きな構想に基づくものでした。筑波大学での研究会や講義も検討されましたが、実現できませんでした。果たせなかった二人の遺志を四半世紀ぶりに展覧会の形で、今回の学園祭で再現したいと思います。

【主な展示内容】

- 司馬遼太郎関係 「司馬遼太郎から青木彰への手紙」／著書、関係書籍
- 青木彰関係 年譜パネル／遺品／写真／著書
- 陸羯南関係 年譜パネル／全集／日本叢書／新聞「日本」オリジナル資料
新聞「日本」関係者の遺墨、著書、資料
- 映像コーナー 司馬遼太郎原作関連映像、青木彰講演集／退官記念DVD（青木塾制作）
など多数の秘蔵映像を上映

【実施概要】

日時：10月6日（土）10：00～17：00／7日（日）10：00～16：00

場所：筑波大学 学生会館2Fマルチメディアルーム

主催：筑波大学 教養教育機構

資料2

司馬遼太郎

出展番号	作者	内容	年代
1	司馬遼太郎	青木彰名誉教授への手紙	1980年代
2	同	近代説話	1950年代
3	同	梟の城	昭和34年
4	同	上方武士道	昭和35年
5	同	豚と薔薇	昭和35年
6	同	風の武士	昭和36年
7	同	戦雲の夢	昭和36年
8	同	果心居士の幻術	昭和36年
9	同	魔女の時間	昭和36年
10	同	おお大砲	昭和36年
11	同	風神の門	昭和37年
12	同	古寺炎上	昭和37年
13	同	竜馬がゆく	昭和38年
14	同	幕末	昭和38年
15	同	燃えよ剣	昭和39年
16	同	尻啖え孫市	昭和39年
17	同	新撰組血風録	昭和39年
18	同	国盗り物語	昭和40年
19	同	酔って候	昭和40年
20	同	北斗の人	昭和41年
21	同	俄	昭和41年
22	同	関ヶ原	昭和41年
23	同	最後の將軍	昭和42年
24	同	殉死	昭和42年
25	同	夏草の賦	昭和43年
26	同	新史大閤記	昭和43年
27	同	王城の護衛者	昭和43年
28	同	故郷忘しがたく候	昭和43年

出展番号	作者	内容	年代
29	同	義経	昭和43年
30	同	峠	昭和43年
31	同	坂の上の雲	昭和44年
32	同	歳月	昭和44年
33	同	妖怪	昭和44年
34	同	手掘り日本史	昭和44年
35	同	歴史と小説	昭和44年
36	同	馬上少年を過ぐ	昭和45年
37	同	花の館	昭和45年
38	同	世に棲む日々	昭和46年
39	同	城塞	昭和46年
40	同	街道をゆく	昭和46年
41	同	花神	昭和47年
42	同	霸王の家	昭和48年
43	同	人間の集団について	昭和48年
44	同	播磨灘物語	昭和50年
45	同	翔ぶが如く	昭和50年
46	同	空海の風景	昭和50年
47	同	鬼灯	昭和50年
48	同	余話として	昭和50年
49	同	長安から北京へ	昭和51年
50	同	木曜島の夜会	昭和52年
51	同	中国を考える	昭和53年
52	同	西域をゆく	昭和53年
53	同	胡蝶の夢	昭和54年
54	同	項羽と劉邦	昭和55年
55	同	日本人の顔	昭和55年
56	同	ひとびとの聲音	昭和56年
57	同	歴史の夜話	昭和56年
58	同	菜の花の沖	昭和57年
59	同	日韓理解への道	昭和58年

出展番号	作者	内容	年代
60	同	箱根の坂	昭和59年
61	同	微光の中の宇宙	昭和59年
62	同	アメリカ素描	昭和61年
63	同	ロシアについて	昭和61年
64	同	鞭靱疾風録	昭和62年
65	同	明治という国家	平成元年
66	同	この国のかたち	平成2年
67	同	風塵抄	平成3年
68	同	草原の記	平成4年
69	同	世界のなかの日本	平成4年
70	同	九つの問答	平成7年
71	同	十六の話	平成8年
72	同	昭和という国家	平成10年
73	同	司馬遼太郎アジアへの手紙	平成10年
74	同	司馬遼太郎からの手紙	平成16年
75	映画	新撰組血風録	昭和38年
76	映画	燃えよ剣	昭和41年
77	映画	梟の城	平成11年
78	TV	新撰組血風録	昭和40年
79	TV	竜馬がゆく	昭和43年
80	TV	国盗り物語	昭和48年
81	TV	花神	昭和52年
82	TV	関ヶ原	昭和56年
83	TV	坂の上の雲	平成21年
84	ドキュメント	太郎の国の物語	
85	ドキュメント	街道をゆく	

出展番号	作者	内容	年代
1	陸羯南	新聞日本	明治22年
2		新聞日本 復刻版	明治22年
3		日本週報	明治27年
4		日本叢書 議会議法規(諫早里平編)	明治35年
5		分県地図	明治35年
6		原政及国際論(十三回忌記念)	大正8年
7		出版月評	明治20年
8		ロシア地図	明治36年
9		日本画報	明治37年
10		東亜時論	明治31年~32年

陸羯南

出展番号	作者	内容	年代
1	週刊朝日	司馬遼太郎からの手紙	年代
2	青木彰	写真	
3	吉田満	提督伊藤整一の生涯	
4	澤地久枝	滄海よ眠れ	1950年代
5	産経新聞	張作霖未亡人インタビュー	昭和35年
6	産経新聞	小暴力追放キャンペーン	昭和35年
7	産経新聞	企業爆破犯人逮捕スクープ	1970年代
8	青木彰	新聞の取材	
9	青木彰	私のメディア評論	平成6年
10	青木彰	新聞との約束	平成12年
11	青木彰	新聞力	平成15年
12	青木彰	司馬遼太郎と三つの戦争	平成16年
13	青木彰	陸羯南に見た新聞人の原点	
14	青木彰	陸羯南への想い	
		原稿	
		ノート	
		遺品	

青木彰

出展番号	作者	内容	年代
23			明治32年
22		清風明月	明治29年
21		春花秋月	明治30年
20		柳暗花明	昭和47年
19		近時政論考(岩波文庫)	昭和62年
18		近代日本思想体系 陸羯南	昭和49年
17		日本の名著 陸羯南	昭和43年
16		陸羯南全集	昭和13年
15		羯南文録	昭和8年
14		羯南文集	明治43年
13		日本青年	
12		東邦協会報告	明治25年
11		東亜同文会報告	明治33年~43年

出展番号	作者	内容	年代
	伊藤重	千島探検	
	笹森儀助	南島探検	
	本多庸一	伝記(青山学院)	昭和43年
	珍田捨巳		

出展番号	作者	内容	年代
	加藤拓川	拓川集	昭和9年
	子規博物館	拓川と羯南	
	国分青崖	青崖詩存	
		石楠花集	
		観瀑詩集	
		漢土高吟集	昭和13年
		漢詩大講座	昭和11年

弘前時代
羯南をめぐる人々

出展番号	作者	内容	年代
	福本日南	石臼のへそ	大正3年
	海国政談		明治25年
	短冊		
	書軸		

出展番号	作者	内容	年代
	原敬		

出展番号	作者	内容	年代
	山田寅吉	甜菜製糖新書	明治14年

出展番号	作者	内容	年代
	副島種臣	高等小学修身書	明治25年
	品川弥二郎	精神教育	明治34年
	井上毅	短冊	明治28年
	高橋健三	悟陰存稿(小中村義象)	明治28年
	国華	二十六世紀	明治22年
	自特言行録		明治32年

出展番号	作者	内容	年代
	浅野長勲	坤山公八十八年事蹟	昭和7年
	三浦梧楼	書軸	
	谷干城	書軸	
	近衛篤麿	書軸	
	野村文雄	团团珍聞	明治11年
	杉浦重剛	書軸	
	諸葛亮		大正2年
	倫理御進講草案		昭和16年
	瑞克拉克的(羯南序)		明治26年
	羅斯珂氏化学書		明治23年
	色紙		
	書簡		
	紅葉の錦		

新聞日本

太政官時代

北海道紋別製糖所

出展番号	作者	内容	年代
	小中村義象↓池辺義象	中等国文読本	明治32年
	荻野由之	欧羅巴(浅井忠 挿画)	明治35年
	与謝野鉄幹	中学国史	明治35年
	福富孝季	うもれ木	
	坂井久良岐	臨淵言行録	明治25年
	井上剣花坊	書軸	
		短冊	
		川柳を作る人に	大正8年
	三宅雪嶺	明治思想小史	大正2年
		三宅雪嶺集	昭和6年
		雪嶺絶筆	昭和21年
	志賀重昂	書軸	
	池辺三山	山水画	
		漢詩書軸	
		書簡軸	
		明治維新三大政治家	昭和50年
		巴里通信	昭和26年
		三山遺芳	昭和3年
	内藤湖南	書軸	
	天田愚庵	短冊	
		順礼日記(復刻版)	明治27年
		愚庵遺稿	明治37年
		滴水禅師逸事	大正14年
	中川四明	短冊	
	柴四朗(東海散士)	佳人の奇遇	明治19年
	桂湖村	十八史略国字解	
	正岡子規	短冊	
		獺祭屋書屋俳話(復刻)	明治26年
		同 増補版	明治28年
		子規言行録	明治35年

出展番号	作者	内容	年代
	井上龜六	倫理御進講草案	昭和13年
	千葉龜雄	新聞十六講	昭和8年
	高浜虚子	世界新聞鳥瞰論	昭和6年
	河東碧梧桐	俳句入門	明治31年
	佐藤紅緑	句集	
	石井露月	一直線(新聞社社長 羯南モデル)	
	中村不折	伝記	
		達磨図	
		鍾馗図	
		呂洞賓図	
		孔老会见図	
	五百木瓢亭	短冊	
	桜田大吾	貧天地飢寒窟	明治26年
	鈴木虎雄	杜少陵詩集	昭和3年
	末永純一郎	富岳漢詩	
	鳥居素川	書軸	
		支那は支那なり	
		類杖つきて	大正元年
	長谷川如是閑	松籟	昭和3年
		倫敦	明治45年
	丸山幹治	ある心の自叙伝	昭和25年
		余録二十五年	昭和29年
		丁稚制度の研究	昭和45年
		ジャーナリスト随筆選集丸山幹治編	明治11年
		溜飲を下ぐ	昭和10年
		硯滴・余録	昭和17年

四季会の人々

出展番号	作者	内容	年代
	井上通泰	南天荘雑筆	昭和5年
	小野鷺堂	三體千字文	大正6年
	市村瓊次郎	東洋史統	昭和25年

長清会の人々

平坂閔	訓蒙動物学	明治14年
松永聴剣	樺太及勘察加	明治38年
三輪信太郎	三輪氏族譜	昭和8年
浅井忠	小学画手本	明治27年
山田喜之助	莫南山田喜之助遺稿	昭和35年
稲葉君山	最新支那史講話	大正10年
釈清潭	寒山詩新釈	明治40年
神鞭知常	謝海言行録	明治42年
小川平吉	書軸	

後継者たち

桐生悠々	射山詩史	昭和17年
丸山真男	桐生悠々反軍論集	昭和55年
	桐生悠々自伝	昭和55年
	中央公論	昭和22年
	戦中と戦後の間	昭和52年

司馬遼太郎・青木彰の後継者たち

半藤一利	昭和史	平成16年
	ノモンハンの夏	平成10年
	検証 戦争責任	平成18年
	新聞と戦争	平成20年
NHK	日本人はなぜ戦争へとむかったか	平成23年

